

紀伊國名所圖會

三編

伊都郡 二之卷

ル 4
325
12





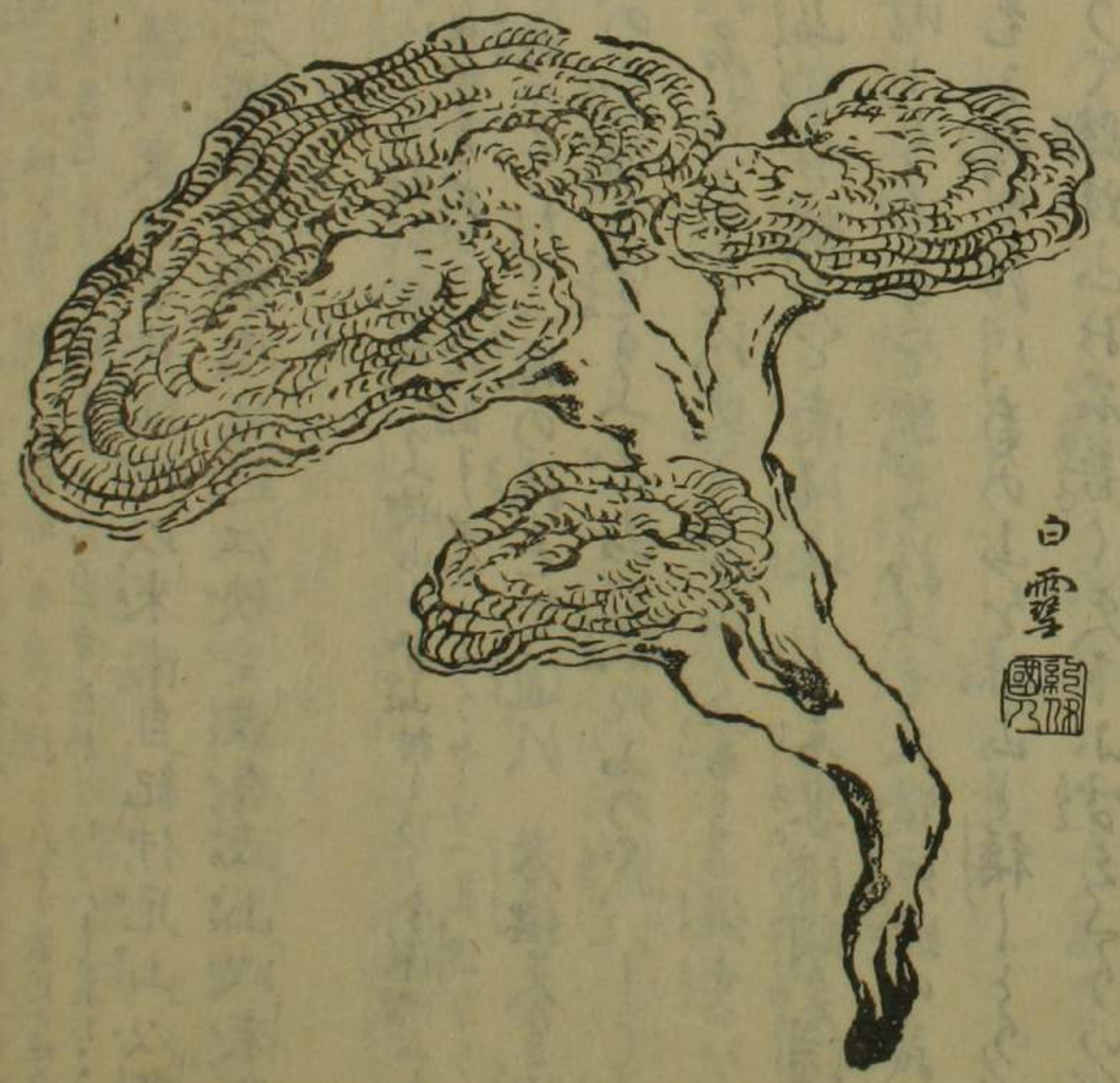
紀伊國名所圖會三編卷之二目錄

伊都郡川北

- 畿内南限
- 加勢回神社
- 大宮回社明神
- 堀越觀音
- 大神宮
- 八國うづふ
- 道の王石御所立
- 行合坂
- 證誠権現社
- 市御借屋回跡
- 坂上清澄
- 妹岐山 妹岐川
- 文覺偃
- 佐夜久宮
- 指理郷
- 大日寺
- 住吉社
- 觀音寺
- 三重塔跡
- 總社三郡明神
- 大枝野
- 舟岡山
- 仙人翁養
- 燈明嶽 定福寺
- 草田山城跡
- 橋の森
- 西福寺
- 龍の井戸
- 鞍屋寺回跡
- 姥龍
- 醫王寺
- 妙樂寺
- 萩原古驛
- 産物紅花
- 文藏龍
- 月壽房圓雅
- 鏡宿
- 地藏寺
- 小回神社 小回偃
- 醫立寺
- 坂上城墟
- 坂上墓澄墳
- 相賀驛



日本書紀云
 天武天皇
 八年十二月
 紀伊國伊丹
 郡有芝草
 其狀如菌
 莖長二尺
 蓋二圍



白雲

東家村
 陵山
 紀伊見涼
 不動山
 西光寺
 霜山城跡
 隅田川
 落合不動

松ヶ橋
 相賀八幡
 河内架維範
 小依寺
 園饅頭
 高橋
 庵侍
 穴部氏

橋本町
 牝川氏宅址
 調御房定嚴
 霜押烟草
 利生護國寺
 隅田八幡宮
 待乳山
 紀和兩國古塚

應其寺
 地藏寺
 隅田一族
 妻の森
 高尾城跡
 粉河田
 塚川

伊都郡 東に大和國宇智郡西に八平園郡 常郡 常郡の西端 山 山名抄に云く 常郡の郷名五ヶ所 常郡の郷名五ヶ所 伊都郡 伊都郡 畿内南限 日本書紀云

大化二年凡畿内東自名壑横河以來南自紀伊兄山以來
西自赤石擲淵以來北自近江狹波合坂山以來為

畿内國

妹妹山

妹妹山 山名抄に云く 今長谷野 今長谷野 妹妹山 妹妹山 背山 背山 村 村 今津伏山 今津伏山 一
條の流を通じ 孝徳天皇 詔
して後と邦畿の南限と定むる見山は妹妹山の麓にして地
形より記され名もさへ成史に見山と書るは假字なる
べし 此山背を越ると南海道と 牟婁津明光浦を
とる行幸の時にもさへを越ると此妹妹山の麓に
とる形して是に對して河川南の山を妹妹山と稱しとるに
風俗に由りて妹妹山は名善く天下小字とるに

その世あつらん此より且難子長者とつる富豪は者
つりりて妹山のかつらあつらんふして風系よれを貴
山とを平らして玉樓を挿し絲竹管絃の遊び成りけ
るばつらとて長者を友とよびとる遂に妹山は名を
失ひ妹山もまゝ山は成りて今之官道とせしよ
る妹妹の姿大に移轉せりとて 或云妹妹山といふは妹妹の姿なり
長者の名難子といふ 妹妹山とて遠近せりといふは

萬葉一

此也是能倭爾四手者我戀流木路爾有云名爾負勢能山

同三

榜領巾乃懸卷欲寸妹名乎此勢能山爾懸者奈何將有

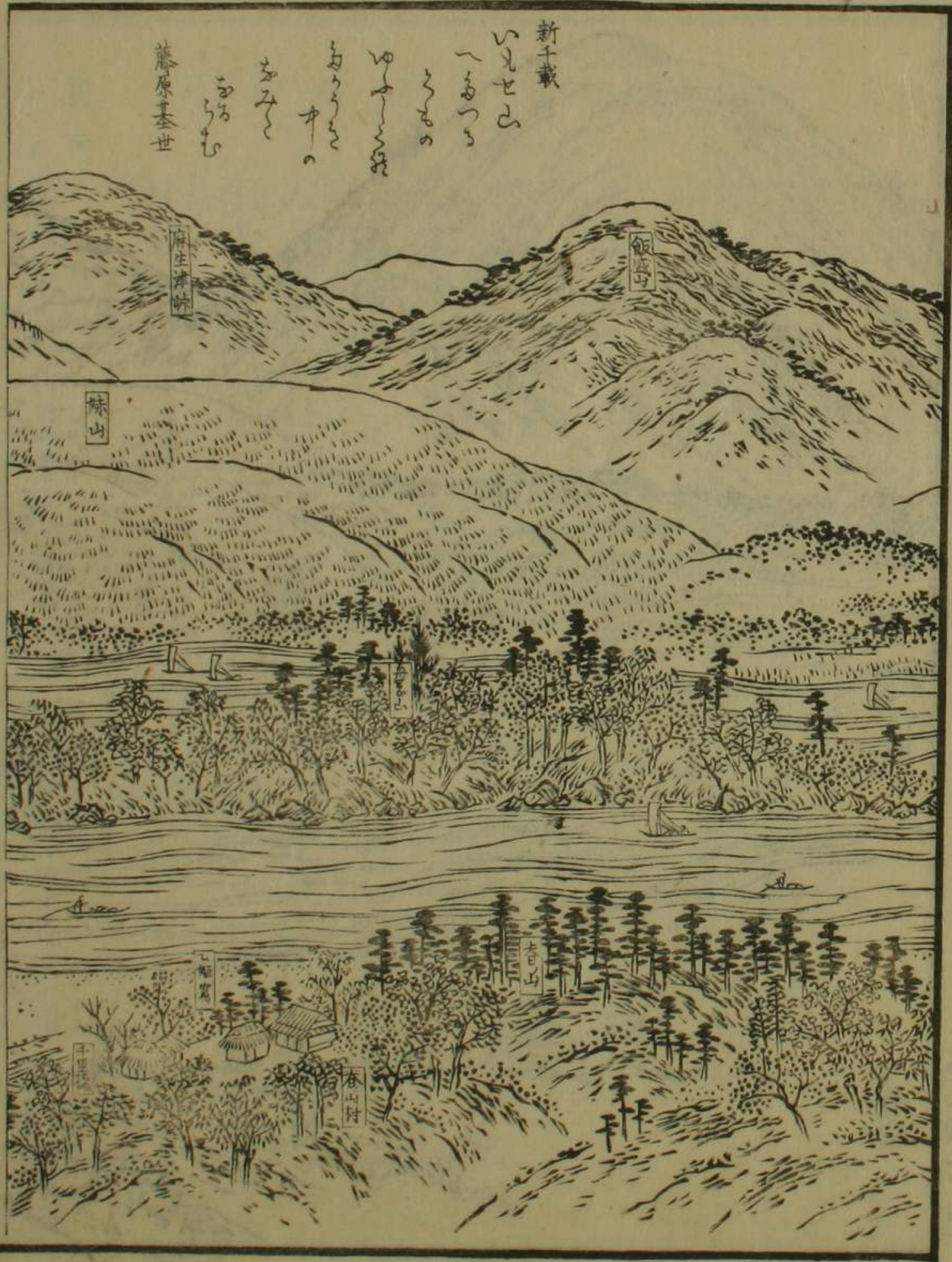
同三

空奈倍吾背乃君之負來爾之此勢能山乎妹者不喚

同三

真木葉乃之奈布勢能山之奴波受而吾超去者木葉知家牟

同三



新千載
いんせし
へんつ
わん
あつ
ちみ
ちみ
藤原千世

山

山

山

山

山

山

山

山

妹春山

山

拾遺

山

山

山

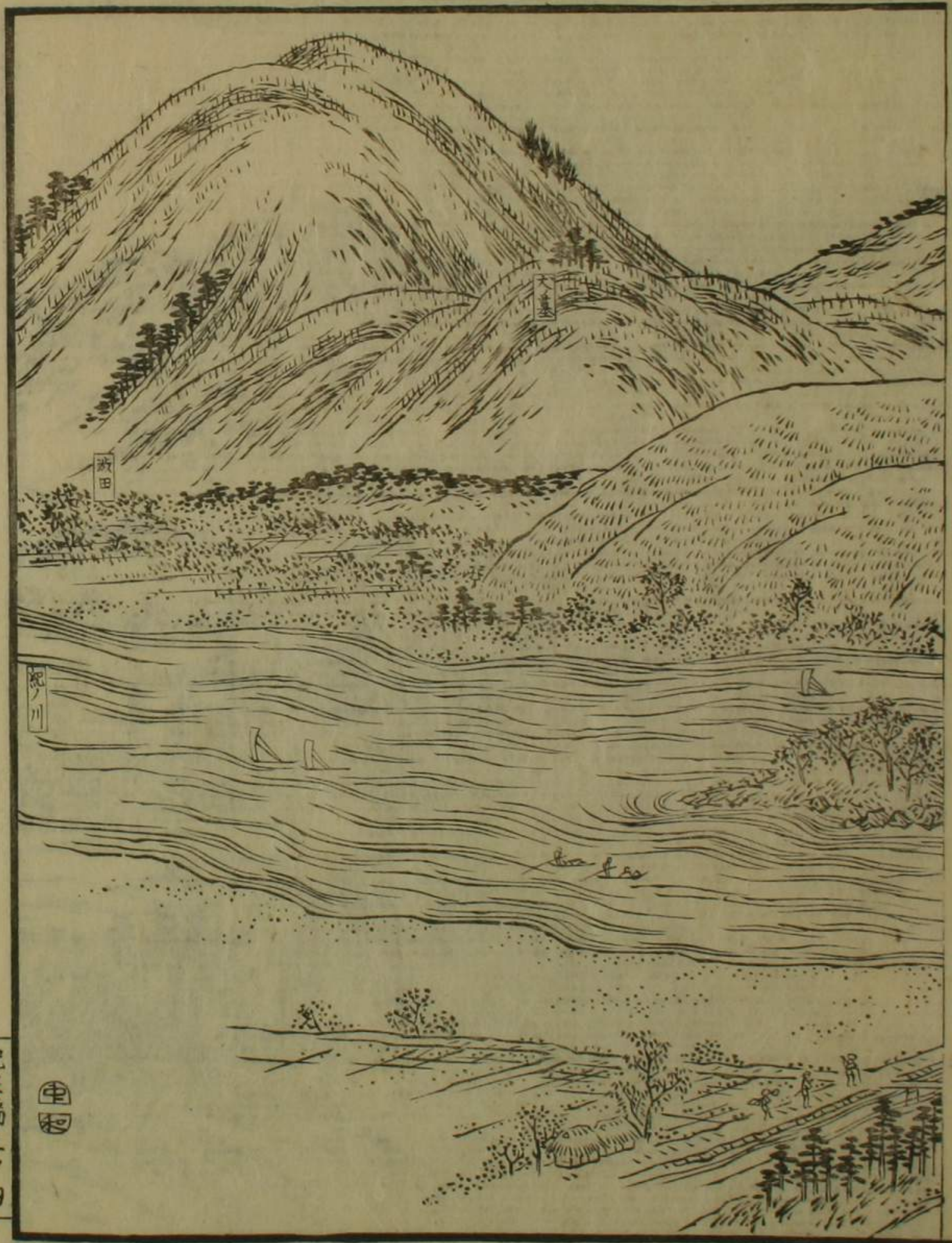
山

山

山

山

三編二二三



紀三編二、四

同七
大穴道少御神作妹勢能山見吉

柿本人麻呂

同四
神龜元年甲子冬十月幸紀伊國之時為贈從駕人所詠娘子笠朝臣金村作歌一首并短歌
後居而戀乍不有者木國乃妹背乃山爾有益物乎

同七
木道爾社妹山在云櫛上二上山母妹許曾有來

同
勢能山爾直向妹山事聽屋毛打橋渡

同
麻衣著者夏櫛木國之妹背之山二麻時吾妹

同
妹爾戀余越去者勢能山之妹爾不戀而有之佐

同
人在者母之最愛子曾麻毛吉木川邊之妹與背之山

同
吾妹子爾吾戀行者之雲竝居鴨妹與背能山

同
妹當今曾吾行目耳谷吾耳見乞事不問侶

同九
大寶元年辛丑十月太上天皇大行天皇幸于紀伊國時歌

勢能山爾黃葉常敷神岳之山黃葉者今日散濫

木國之濱因云鯁珠將拾跡云而妹乃山勢能山越而行之
君何來座跡玉鉞之道爾出立夕ト乎吾問之可婆夕ト之
吾爾告良久吾妹兒哉汝待君者奧浪來因白珠邊浪之縁
流白珠求跡曾君之不來益拾登曾公者不來益久有今七
日許早有者今二日許將有等曾君者聞之二二勿戀吾妹
及秋五首
今畧久

古今

後撰

金葉

新勅

新續古

妹背川

續後撰

あはれは妹背山の中よりあつて昔は乃川と云ふや世中
あはれは乃川の中は流るる雲の煙もあはれ
同
公實

あはれは乃川の中は流るる雲の煙もあはれ
同
公實

あはれは乃川の中は流るる雲の煙もあはれ
同
公實

あはれは乃川の中は流るる雲の煙もあはれ
同
公實

あはれは乃川の中は流るる雲の煙もあはれ
同
公實

あはれは乃川の中は流るる雲の煙もあはれ
同
公實

あはれは乃川の中は流るる雲の煙もあはれ
同
公實

續古今

玉葉

新千載

新後拾遺

賴通公高野詣記

あはれは乃川の中は流るる雲の煙もあはれ
同
公實

あはれは乃川の中は流るる雲の煙もあはれ
同
公實

あはれは乃川の中は流るる雲の煙もあはれ
同
公實

あはれは乃川の中は流るる雲の煙もあはれ
同
公實

あはれは乃川の中は流るる雲の煙もあはれ
同
公實

あはれは乃川の中は流るる雲の煙もあはれ
同
公實

あはれは乃川の中は流るる雲の煙もあはれ
同
公實

あはれは乃川の中は流るる雲の煙もあはれ
同
公實

あはれは乃川の中は流るる雲の煙もあはれ
同
公實

あはれは乃川の中は流るる雲の煙もあはれ
同
公實

あはれは乃川の中は流るる雲の煙もあはれ
同
公實

あはれは乃川の中は流るる雲の煙もあはれ
同
公實

あはれは乃川の中は流るる雲の煙もあはれ
同
公實

あはれは乃川の中は流るる雲の煙もあはれ
同
公實

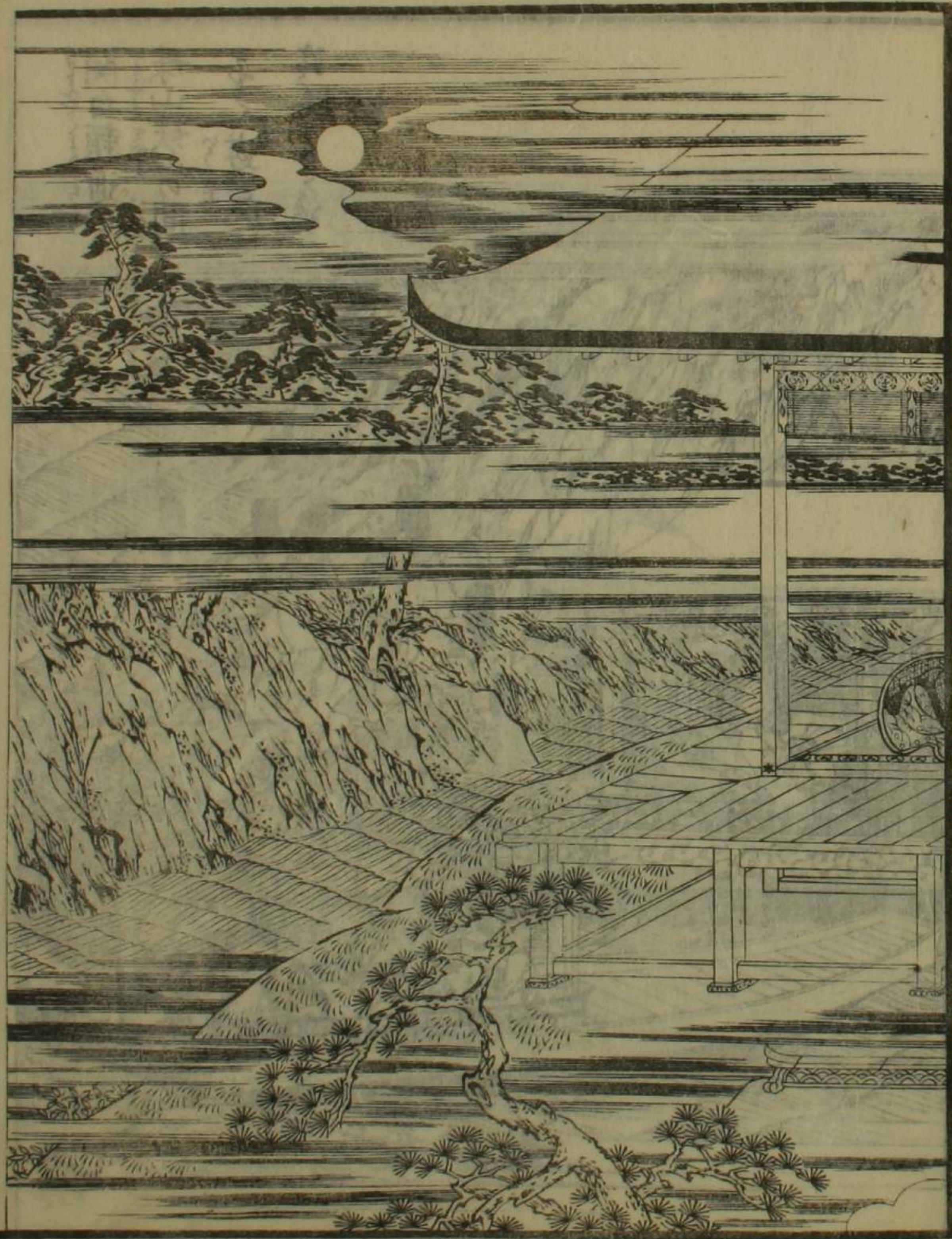
あはれは乃川の中は流るる雲の煙もあはれ
同
公實

あはれは乃川の中は流るる雲の煙もあはれ
同
公實

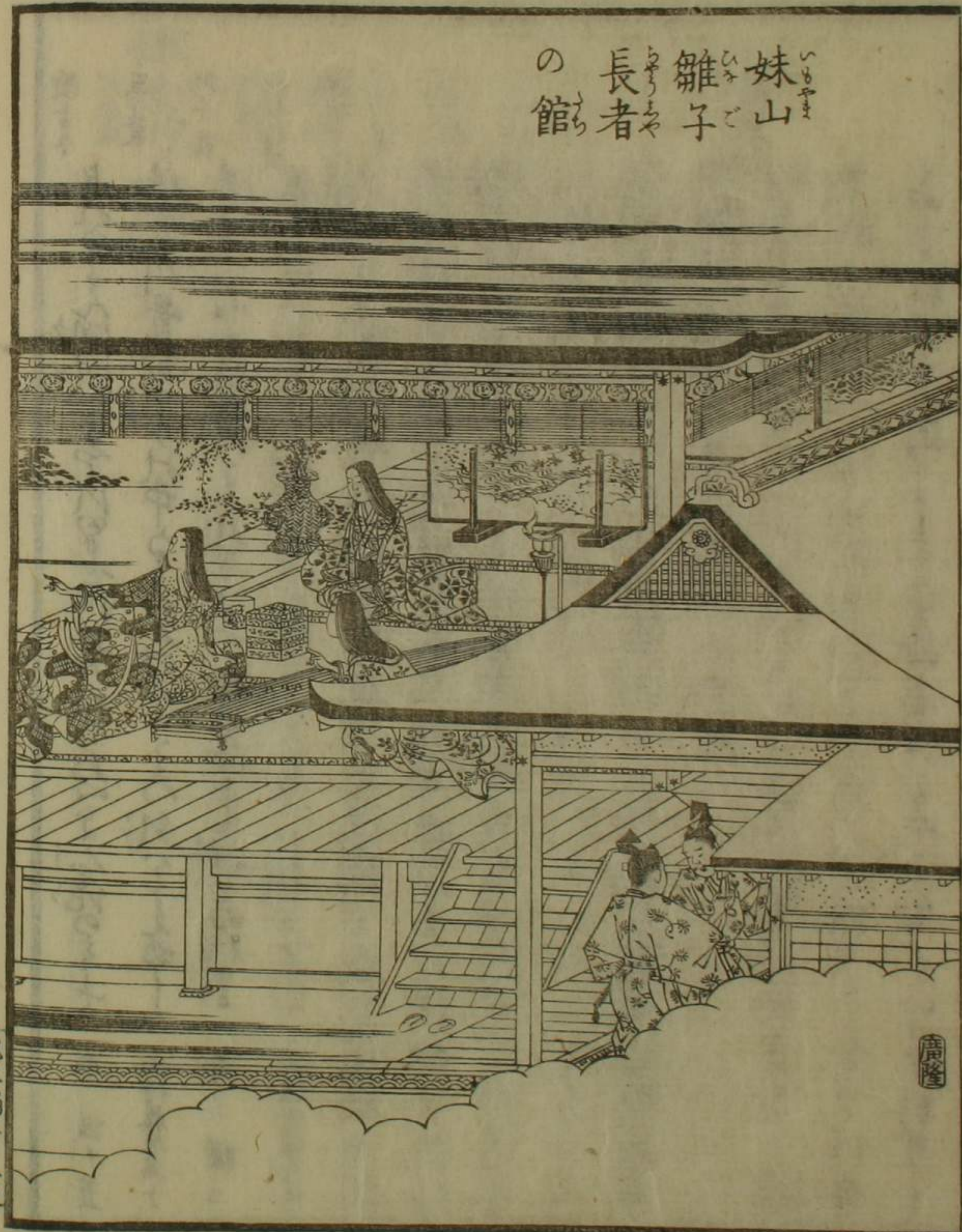
あはれは乃川の中は流るる雲の煙もあはれ
同
公實

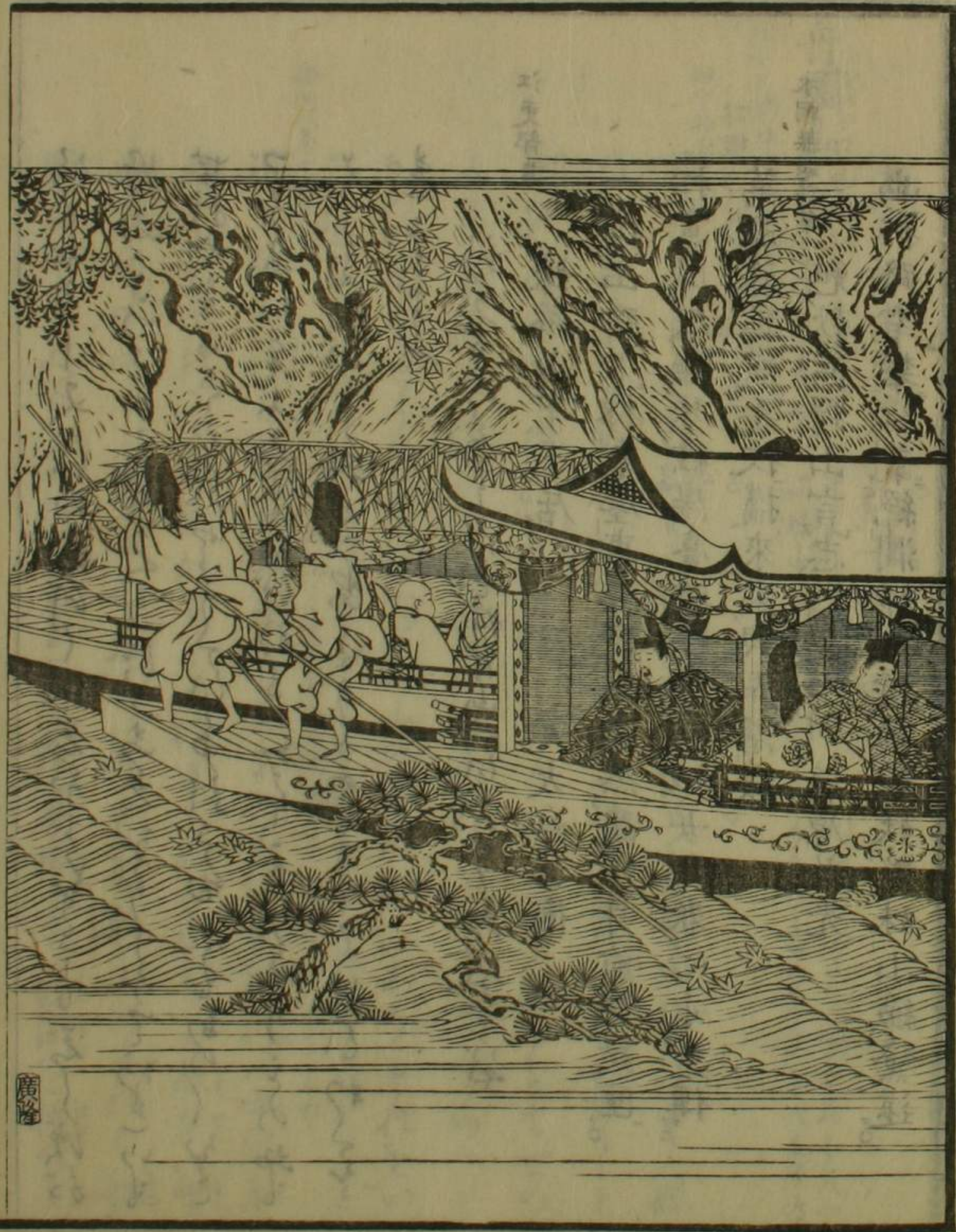
狭衣物語

あはれは乃川の中は流るる雲の煙もあはれ
同
公實



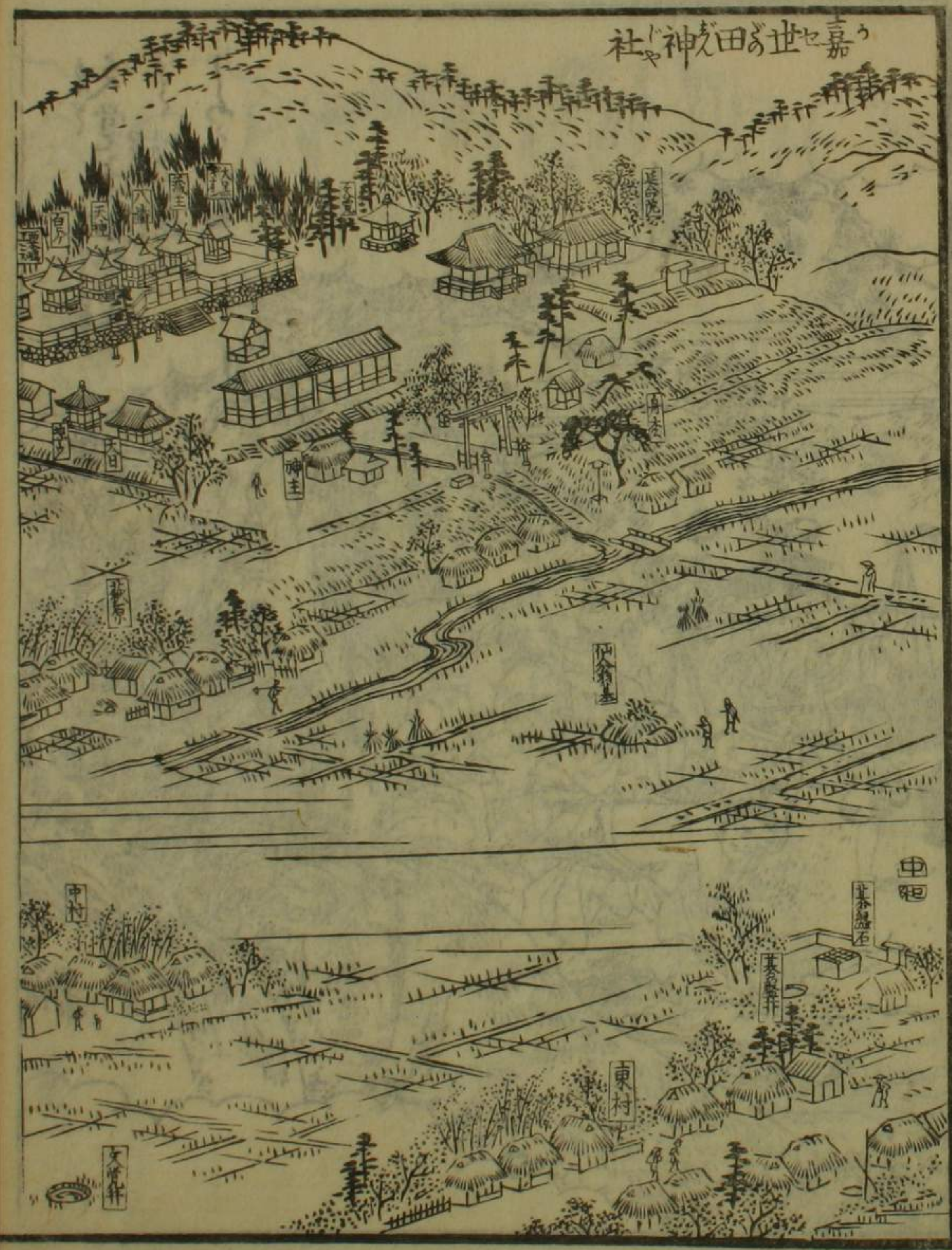
妹山 雛子 長者 館の





関白頼通公
妹山妹山の間
多く遊覧
臨つと後





頂上辨財天を鎮ト脊山トシテ八幡を安以脊山村の千
 里橋といふ所あり妹山の麓を志富田村といふ縁起に
 昔此村の信女家を運びて観音堂を改修建一奉
 了南山縁をて城眉に比しつべし松風詠に
 流るる岩よりせられし川音を碧潭の蓋よりも青丸小
 秋の夜は月さやく小糸を海を海あられさしつべし

萩原古驛 今萩原村といふ所より北より名所の神舟生谷村
 西ノ山馬宿を経て能山のやまを越て書村よりあまをた通し
 延喜式云

紀伊國驛馬 萩原
 八匹
 日本後紀云

弘仁二年四月廢紀伊國萩原名草賀太三驛以不要也

同三年四月廢紀伊國名草驛更置萩原驛云

寶来山大明神社 系系村より加勢田庄中の本居
 神より本社に社末社五社あり

○神竈 鉄弓 二張 ち刀 一振
銘 賀勢田庄日本大「大福田宝来山
 大明神天正八年八月上旬國次作

○鳥居 勅額長二尺五寸横一尺
 五寸書符精神あり

神像 一幅 文覺像 在画わり
 賛畧之



廣隆



文覚上人加勢田庄
堰を造り
しるすの圖

紀三稿二十

當社ハ夷賊降伏の神おほりし海外の地より七珍百宝を
奉朝貢する海路を守護し終に靈神かれを宝来山
と稱すまづるや一説は宝来ハ蓬萊乃假文字あり
べし其秦の徐福が故事によつて奉國熊野の地を蓬
萊ともつて世に知らるなり當社を即熊野三社権現
を祀り又此地ハ仙人窟といひ人もりりし蓬萊の名
ありあつんとつり程遠く此考あれども今洋より性
壽永の比りと云故に後白河上皇この地を山城園高
雄山神護寺に領し布施し多しひとまはるは乃文覺上
人志願ありて熊野高野に清せられたる序に此領地湯と
ありしれりわづ特に當社の再建設を例に神文寺以て
く此町の鎮後々終るも此地水潦乏しく作毛の早
撤うら續と土民乃患少くごふよりせえられ上人然

いづてとくといひ也先此地を巡見を致し少く尚
まゝ舊城乃連峯秀出し溪泉漲りあつるとりり上人
例の豪邁なまハ別去民を指揮して巨巖を切り鑿り滿血
を俵し先日終りて切なり領内の田地飽す水と冷
く多しを得る世あり多し里人大小上人を感し
ふと限りおし京より毎年七月廿二日よへて給懸乃為
少くて郷中の寺僧を請り當社に於て法華會を修り天
正の頃より高祖の領を没収せられしとも法會竟し
終るなり後大永年間加勢回仙人窟是古といふ豪富
此者ありて大に當社を尊敬して同五年終る也 後拍
原帝の震筆此額を給り多し今も不廣前のも居るを
神威乃盛なり表せり額面の文字ハ正一位勲八等日本第
一大福田寶来山大明神と書させ終る

文覺同村領少のゆゑにあり、嘉永年中文覺上人
仙人翁東村右乃の側は古種の形にて好境あり、同五六引あり、
仙翁古種は古種の形にて好境あり、同五六引あり、
仙翁古種は古種の形にて好境あり、同五六引あり、

○碁盤石

同村人家此石あり、
石と云傳へしなり

見せしに、後柏原院の三宮青蓮院宮を山に移して去る
らく其院に沖澤留坐せり、翁忠やう小侍を執此を、
聞て連一繪旨を賜りて、其地貴し、た中、文中、小純
泉兩園乃僧俗の代官といふを免さゆ、
子孫湯子小農吏等、官位成免し、
遊放せしれ、家絶しとぞ

下論旨、於我國紀州伊都郡

高野山禁裏御宿坊之事、小田原御所坊也、并唐船
高藤琉球船折待守可任先例、後次下山、天野御宿

御殿役人、参内仙人翁是古也、兼又三宮青蓮院有
去子細高野住山之時、是古種、忠節無比、類惟由
門跡一同奏上、歡感之餘、紀州泉別場南北僧俗官
位之御代官、永可傳家者也

大永五年八月廿七日

右大辨

参内仙人翁是古

本書高野山巴法院蔵

唐物紅花那實伊都郡

南州雜詩

頼山陽

麥秋時節、開村家夫往揮鎌、婦打枷、誰道小姑無個事

又呼女伴、搗紅花

大宮四社大明神社

大宮四社大明神社、
同村

十六勢塚

文信乃、あらず平家の殘黨、十六人、これ山中、お隠し、
し、



燈岳神燈
龍女今何在
神燈名僅殘
晨星懸嶺樹
猶作昔時看
木村寺

松多寺
とらや
こや
あまのりか
とら

風

望山

大窪

植尾方登り
四十二丁

平野川

廣隆



四脚谷
植尾方

宿山

七越峠

木ノ尾

燈明嶽

中瀬

金尾池

紀三編二十三

月壽房圓雅 同村の親少く密教の素より元應年中高野山五定密教部祖院を草創して光明帝を信を慕はせ給ひ曆應年中兵部少輔顯成

大神宮 乃劔して和名國として併致

大神宮 乃劔して和名國として併致

指理郷 中古ハ中飯津東飯津西飯津と三村一郷とてなり今新飯津ハ廢して田地

産物川上酒 郡中送酒家多く氣味を佳し遊郷及存下

川上縞 郡中の婦人履襪は白を敷き花及赤下

榛の森 西飯津村より北西に榛あり俗に本高野の墓所とて靈を尊るといふ又

鏡宿 暖城岩村の長中より二十丁許に

昔楠廷尉此地に坐りて方と遠を以て放りて白銅鏡を埋

りて之を以て白銅鏡と名づけり此地遠近

を以て之を以て白銅鏡と名づけり此地遠近

を以て之を以て白銅鏡と名づけり此地遠近

を以て之を以て白銅鏡と名づけり此地遠近

諸山眼下にありて楠遠見の壇此名を以て

八圍がほと 暖城の西に西なり諸山 紀伊大和和泉河内

天女山地藏院大日寺 大聖村 遠の山あり真言宗境内に

什物龜石 大聖村 龜甲の形 腹の裏に石あり

車瀬 大聖村の南名倉川 回系川乃 暖城上皇 高野 赤坂の町に

西福寺 名倉村より真言宗境内に

正平十一年三月十五日 光明真言一結衆等

地藏寺 西福寺より隣り寺内より石枕 龜乃 極基を納む人

寸なり

寸なり

住吉大明神社 小田村より境内に本多く本社あり社社の内小田村に
長足魂御吉神あり

瀧乃井戸 南名村の鑿五丁より清き水
小田神社 小田村より右の社地蔵元和年中石の宝殿を建てり延嘉
式神名帳より小田神社を國神名帳より五位上小田神社あり

守り河を小田の御神のまをりておかしき事ありしむ 清く人あり

○小田堰 同村より元禄年中大畑才助より水の水利を敷く紀川をせりて
始りては堰成りてり國中第一の堰小して較り石を回固り堰瀬は

射行相乃坂之踏本爾開乎為流櫻花乎令見兒毛欲得

観音寺 神野村にあり
什物 古寫大般若經六百卷 卷毎に六ありしは經の南都東大寺にありしと
ありし書一揃ありて授正の人ハ濟儀等の名ありしは經の南都東大寺にありしと

第二卷一巻跋書模寫

小田神社



してこれ寺におつ法事を備へる良の右京此茶師寺の僧
 親惠禪師字を依綱の禪師といふ俗姓を請して十一面観音を祈志
 して悔過成すけり時久しれ里小むらりのさうら男あり
 姓を文忌寸字を上田之希とす川南に上田郷あり天骨形小
 して二寶を信ぜば上毛野公大橋の女を妻小むらり
山のふりしに上田村あり上田郷より一里妻史の留守日一日一紙八紙
 戒を授けぬ寺に集して居る外より帰る
 て是れ妻史一家の子に之を去りてれりあつて大
 一怒りかゝると小生く妻を呼ぶ導師あま成るる義を述
 らるべ小教信をかの支りてあつていつく汝え年吾妻を
 婚入用乃口を叩く致うらうんおど悪は多言を法に
 絶つて即妻をむれり家に之りあまを犯れこれんふ
 してむらりか救多の蟻のけくよとともなくあつて其後

を時久が三希痛に多むとて死らり刑をかへびとい
 ども濫に僧を罵り殺法を忍ぶと殺あり此現報と傳か
 たりといひ小古城生一善云をゆりて之とも情く僧
 成を殺しつゝあつて候笑をあつるあむらり云々妻一々本書と
 物修和名抄等

瑠璃山金剛院醫立寺

棟札

當寺瑠璃山金剛院醫立密寺本尊藥師如來者弘法
 大師御作而建堂舍安置給云云而經數年星霜稍爲
 頽不忍見之以十方之施力再建焉依之當住某申
 一日設齋薦修曼供序二日執行於傳法灌頂及三且
 執行於結緣灌頂壇者五百三十餘也
 于時文祿二癸巳載八月八日落慶
 願主 醫立寺現住長傳謹記

證誠權現社

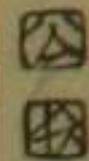
○神寶 古鏡一面

の寄附状等
救通あり

此地相摸新築御あり圓形一丈八寸許又古文書正平年中



ふみ清水
舟井清水
此水ハ至寒井
味ハ至寒暑
に増減なく
ゆらゆら湯で
ふみ清水
を飲んば
心清く
泉鏡なる
とくく文々梅
聖食詩の
ころもは



大畑
竹尾



細三編二ノ九一

三申紛失状之事

右子細者為紀伊國伊都郡相賀之御莊柏原澄滅權
現御供灯明祭礼自根来寺御寄進之處實正明白也
就中奉澄文者實正四年七月十五日島山殿當團
園ノ城ニ御取籠之處ニ山名タシヤウ殿御タイシヤウ
ニテ御セメ入倭然間物取乱入倭取ア工入奉澄文
斗米公事錢其外數之宝物權現之社内ニ隠シ墨申
所ニ物取引ウシテ復之間為後日龜鑑此紛失状立
申所如件

寛正四年十一月十二日

柏原村

氏人各々致

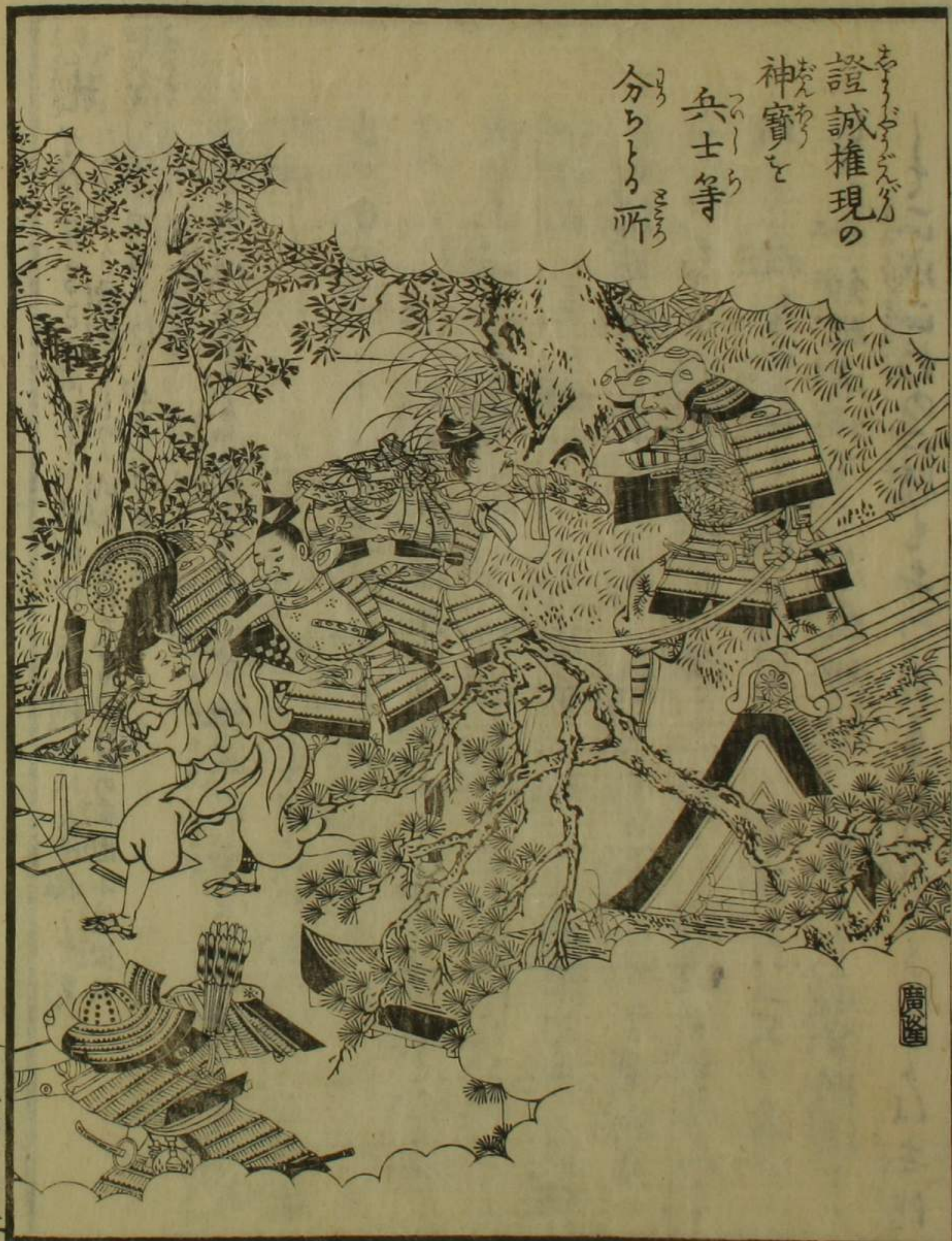
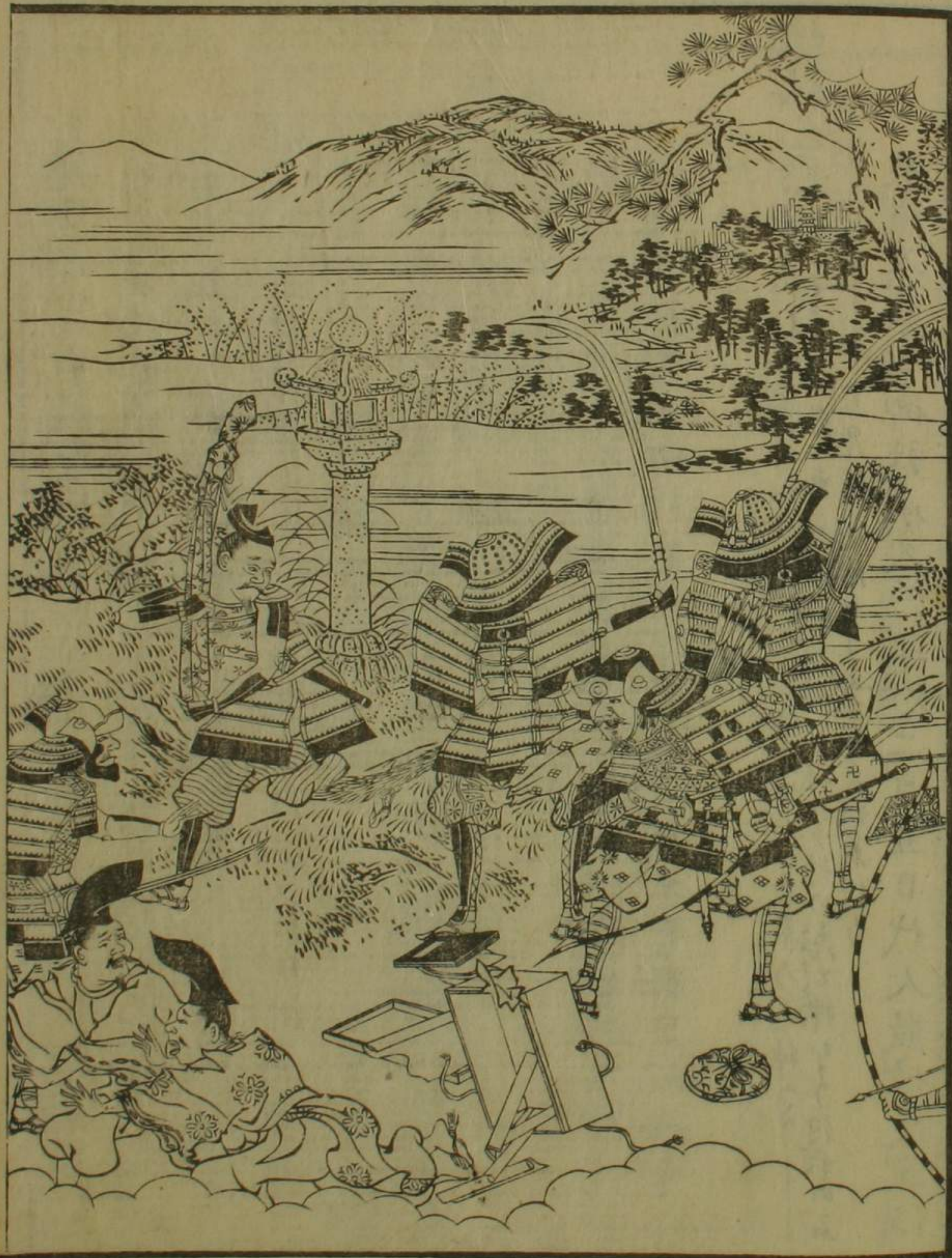
三重塔壙

日本後紀云

延曆廿四年五月己巳朔己卯遣修行傳燈法師位聽福於
紀伊國伊都郡立三重塔為聖躬平善也

姥籠 聖村の領事と又同く此岸柳より河弘法師村にて突
錢坂城壙 同村より西へ丁西八平地小

南水の朝よそ名守えり生地氏乃築き所と相賀
新城といひ〜〜〜生地軍記〜生地氏の祖ハ坂上回村麻
呂比世の孫正六位上志州極坂上仲澄の裔坂上朝澄也
いよこれ人極久年中采地を奉園に受て相賀莊を領し
城を禿村の東園に築き細山と名つてその孫を尹澄とい
お條氏といふ盛あり〜以郡司と稱して威權を專らし楠
正成朝臣妹をその子と娶せ交代厚らんと著姓する
り知るべし尹澄即楠公乃旗下に屬し南朝小倉法師を
以て姓を生地と改む尹澄の子を安澄といふ父と志す
ひく千弼破赤坂等小属戦功あり〜とも南方搬運し
して正成正仍の二將も亦つて其多討死せり〜は安澄



證誠推現の
 神寶を
 兵士等
 分りとり所

も時のむくうを致さて故郷に歸り遂に其地小く
るれく浪士と稱するを縁を復澄といふ本國の守護高島
基國より一と義澄將軍より意欲安堵の所教書を給り
永享此和畑山の城をこの地に移し其後生地中興乃祖と
次後流七代乃孫茂新左馬右衛門とて天正二年島山賊
亡の後織田家小房一慶長五年園原乃役討死といふ
市御借屋舊址市御村御下り

永承三年關白賴通公高野參詣記

十月十三日午刻著御紀伊國市御借屋民部卿所領邊去嘯啖山
之南州許町木御川之北不經幾占樹木蒙臙泉石幽奇之
地云

總社三郡明神社市御村小房正平の比は此地贊川有家乃氏神なり
奉施入春日御社承久三年歲二月五日代人散位從五位

紀三編二ノ四

下連遠經判一男中臣忠基一技了

總持山傳法輪院醫王寺同村

當寺ハ小條時頼入道諸國經歷の擢り此地一帯杖を留
めく禪法を弘めんく免草創せり大伽藍なり一々屬兵
醫一羅ふて奉尊業師如來を此假堂小遷以といひ傳し
又堂内ニ時頼入道乃本像あり長らく計して大なる侍坐像
なり入及るる彫む所といふ又大なる額ニ面を畫せし
愈々り皆臨濟三十二世天龜山人圓通此書なり是亦彼災
を免ぐれしものあり

坂上基澄墳醫王寺の西

基澄ハ桂川氏の祖四條院乃御宇此人少く小條より居り
これ石室高一丈許南方を塚の内を畫しして方一丈許左
右石を畫し後とよみ金石を以て其意を傳し五輪

して憐れよやとひりれを子迷ひをりてろが皆□して
をどに付て居る我よは君を過さるるよとよよかどに清徳よ
ま始るる角を居る者よりいれれすて頂の許し皆人衆を押し
ゆをりつ小なるるり少らんとわりひく物を假してえとされ
を君ととつるに馬よき者六騎甲冑を急細皮を負れ
物々ゆをりつげるる者とも箭を番て己の敵を射殺しんと
いん早うと達よるりて強盜の謀つるなり

大我野

相賀村二十箇村の内市勝東家寺職ニケ村の田池の字一柳家甚といふ
りうこれ大我野あり相賀と書せゆハ音遊とて誤るなり

萬葉九

大宝元年辛丑冬十月太上天皇幸紀伊國時歌十三首の中

夫木

山跡庭聞往歟大我野之竹葉薊敷廬為有跡者
吹さるる風城さむねねか此れ竹葉かりれうと佳め
中務みま録倉

丹生山藥師院妙樂寺

乃わらり
寺傳云當寺ハむろ弘法大師の姪如一尼の居せし所に
て暖藏天皇敕願寺とてなす云々天正九年織田公乃

て暖藏天皇敕願寺とてなす云々天正九年織田公乃

高野政代の時危殆れ為小悦拂りて古物も多くハ悦失して
大師作乃大日如來本像一軀行基作の業師本像二軀弘安
元年親心寺より來る西大寺ハ興正菩薩の書二冊元中元
年田地寄附狀等今僅小存と

勸進沙門悟阿敬白

請殊蒙十方檀那合力早果一寺再興大願遂佛

閣塔婆等造營子細狀

右紀伊國伊都郡高野山麓相賀莊妙樂寺者西大寺
末流三十四箇所之隨一東方教主藥師如來安置之
靈場也云抑當寺之爲體東者吉野之山櫻供花於
醫王之前南者高野之峰月挑光於本尊之燈西者妹
背之川浪鳴聲於佛壇之磬北者葛城之山雪添色於
堂舍之粧是則自然所得之勝境也爰永仁六年之比



依興正菩薩之歸依被成御祈願所云

文明五年癸巳三月廿一日 勸進沙門悟阿白

相賀驛

非賀郡名子取より江里東家寺脇古坊田妻河津の五村より人馬を出入東家及橋本より傳馬所あり

東家村

寺脇村の東に接し北伊豆峠より七十丁なり。宗太坂及やぶの諸圃より北伊豆峠を経て東家寺脇より傳馬所あり

東家渡

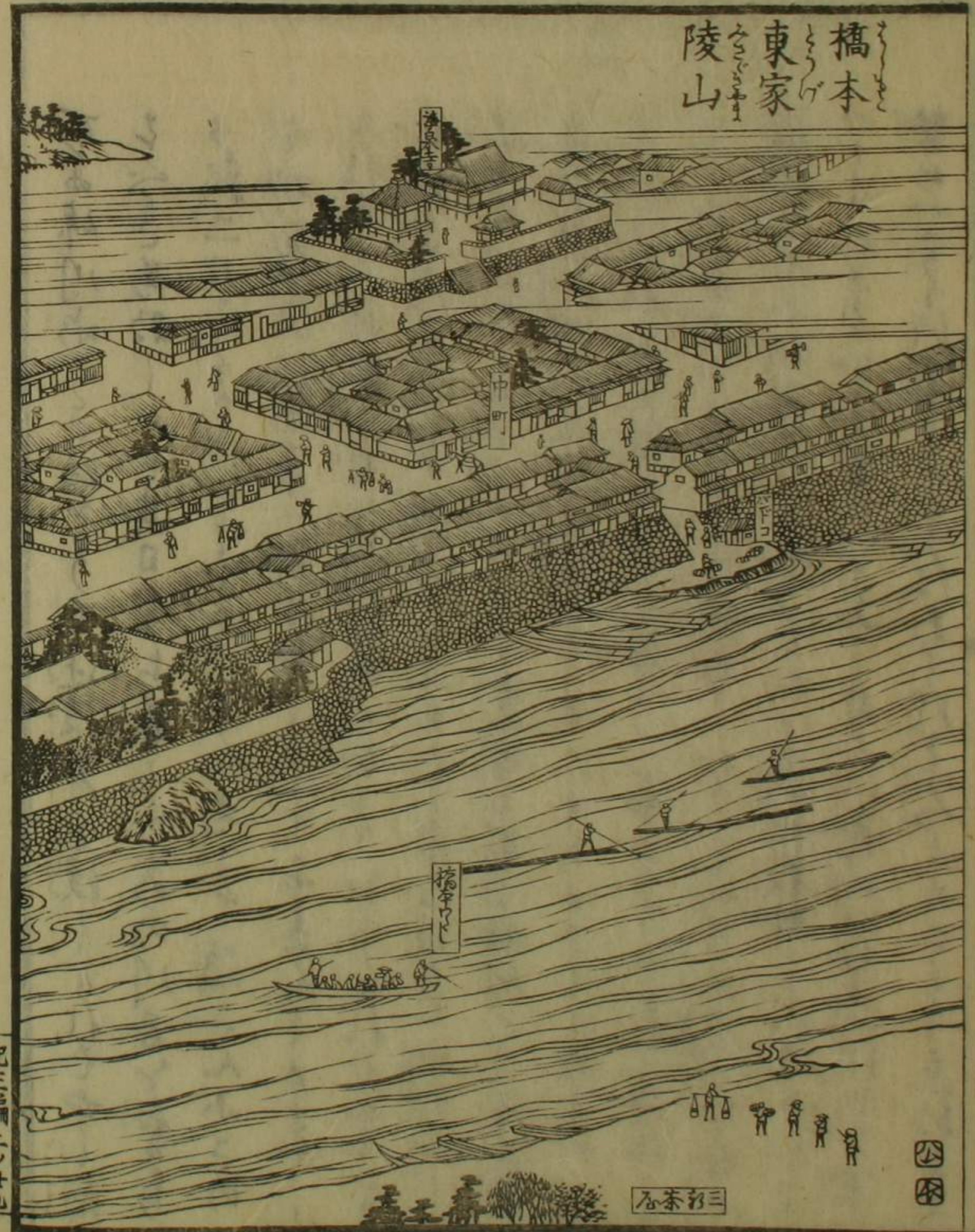
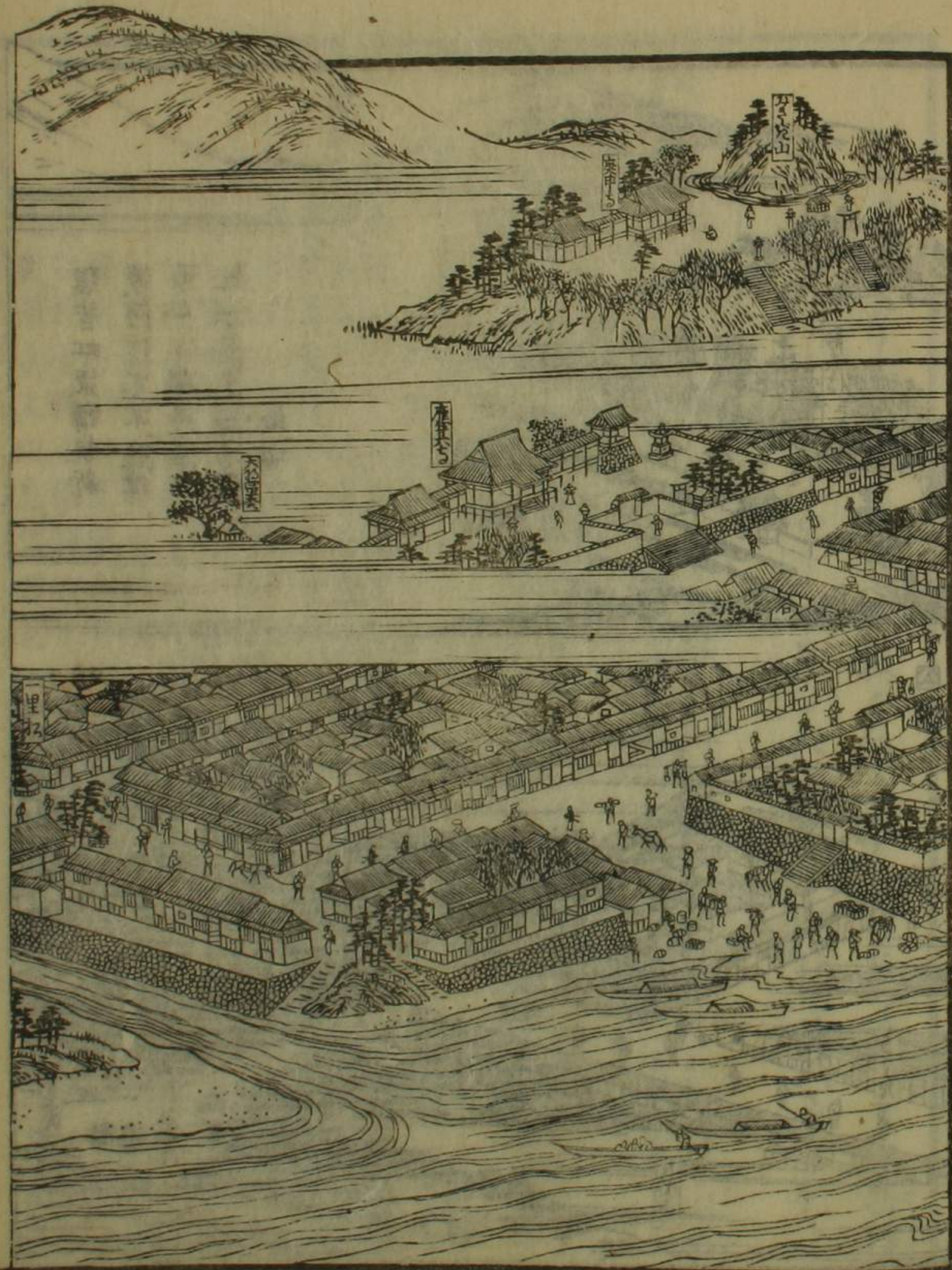
川南清水村に住来川高野山寄庵奇跡の事

室町殿日記

高野山寄庵奇跡の事

信長公高野山討ち此大將小松山城州一萬六千とて押寄せ
涼川乃あり此宿より陣とて中陣に居らるといふ所小
とを急し一日諸勢休息して明日よせんといひこれをも
兼の夜中よりそくれ暑う多ゆ方よりあうけきびつと
と程遠とて所より次牙よまやらむとて大西陣とてい
まかくし晴るをねむらふとて日も昼中をぬりしきと
中より急晴るといふこれとていふとていふとていふと

所あ涼川水とて浦をりて逆浪巻を授けられを中へ渡
とて馬好しとて其日うち暮してあの川をとおもら
り就二日むらりりしとて今もや馬とて渡さん小この
と押あがれ程の事いあるゆとておまんといひか
りれを大將織目つとみかゆとてりをりれをやがて
目留士城よりいし療治を二日むらりりしとて丘目か
ん中より程いしばん地もより免申る所は城別とてり
まふ所小姓とて池田系女とて十六七あるとてりとの
りきりかかき眼又いしと物くるやあうそれを療治し
りれを家老のよりち又眼血をみるもいしとていしと
程れその小目やとてつてたふあ日殺す程小系乃よ
りとらんりちか軍はつちと日々に飛北はむといふも軍
勢めいしとていしとていしとていしとていしとていしと

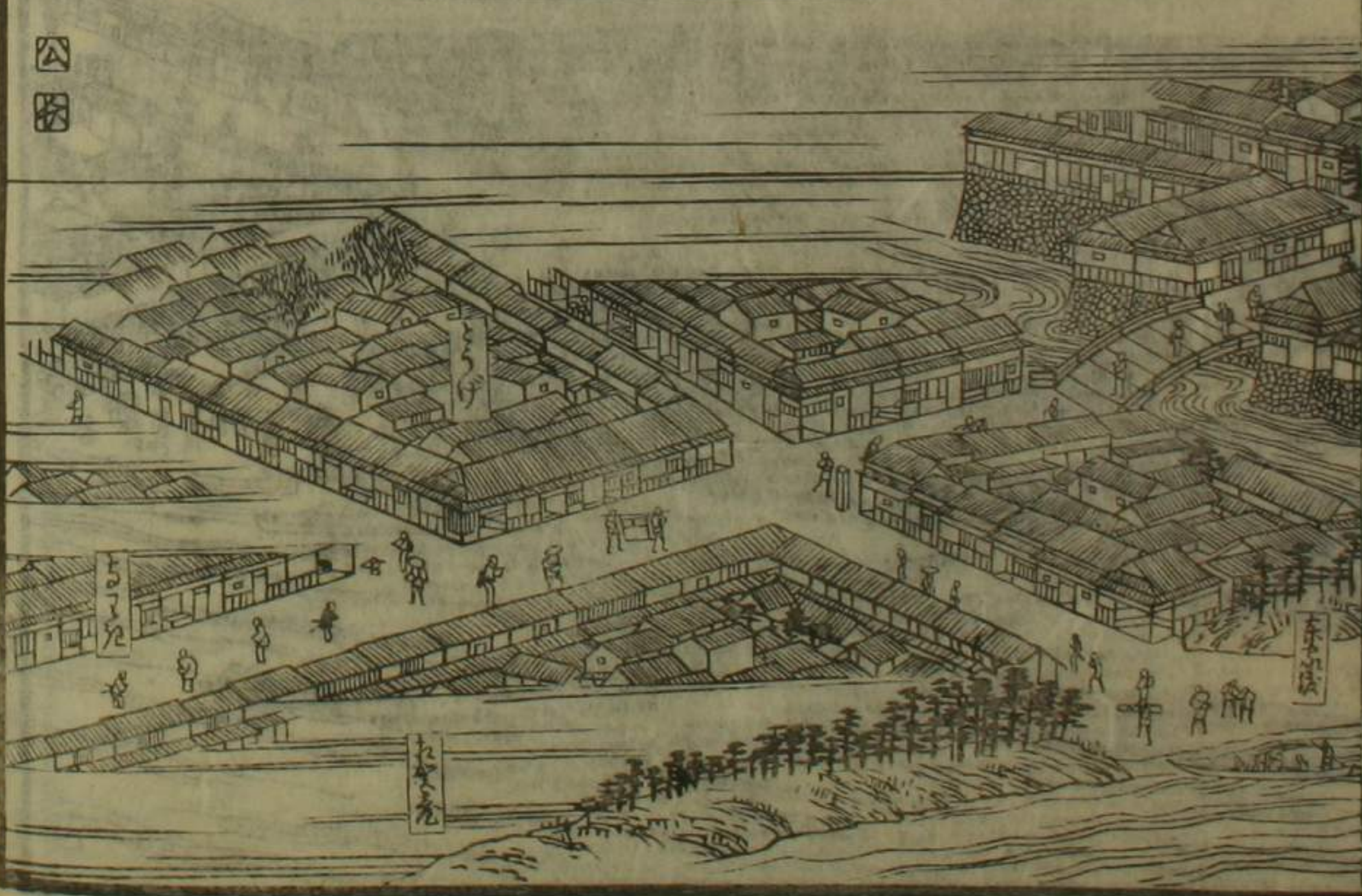
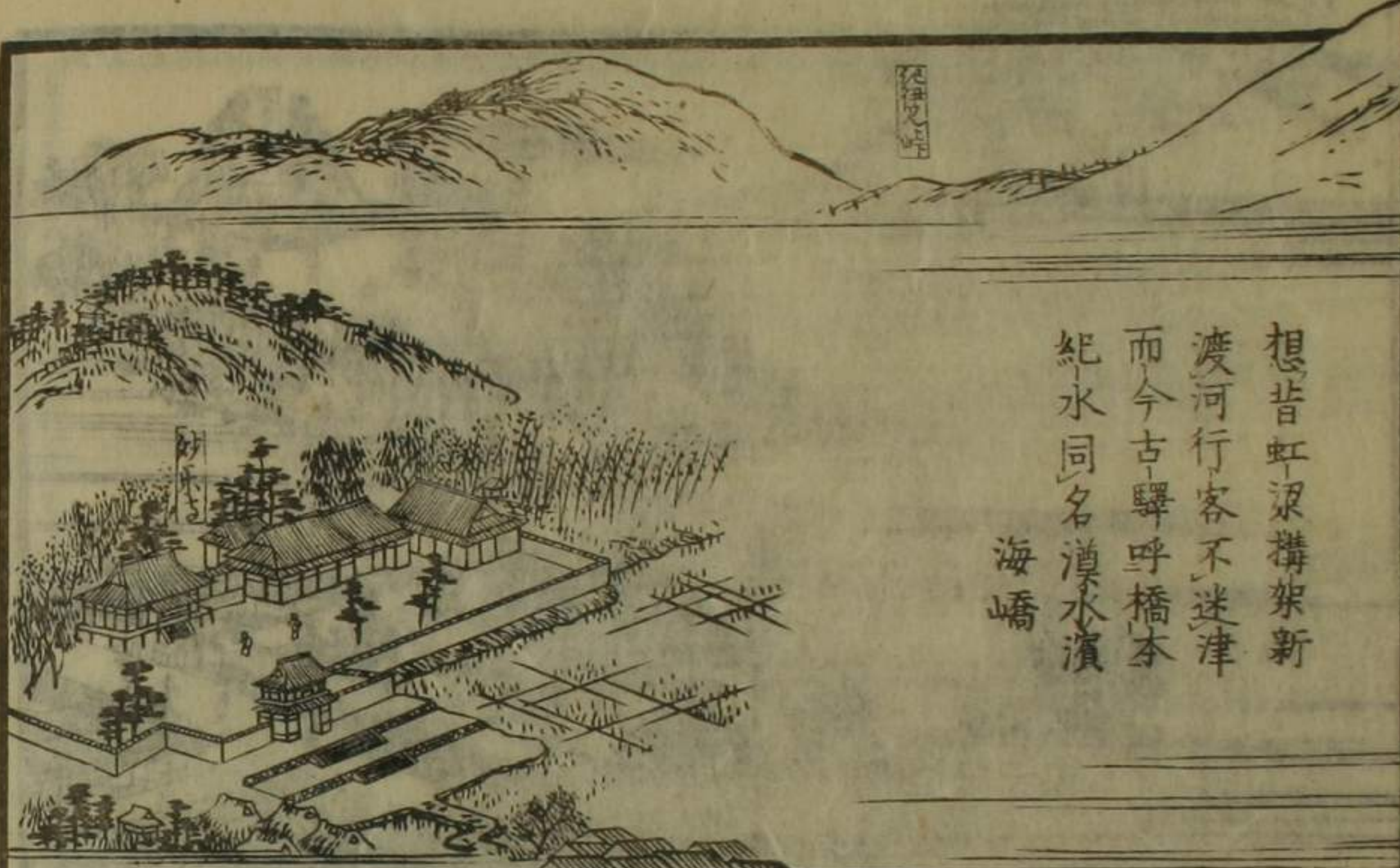


紀三編二廿九

石茶三

四

想昔虹梁構架新
渡河行客不迷津
而今古驛呼橋本
紀水同名漢水濱
海嶠



思ひ給へりりわくして日敷るるりりれをいさぐり無根
ハ費之何も思ふ中もふもふれあ中へ此付く致すれと
上下ささやささりる

橋本町 東家橋本此間一流あり源高き上りてありて紀川へ入る意ハ飯橋
少くありて以て文政年中今此巨橋を架以て東家里橋一六杉樹ありを
橋本町 橋本町 橋本町 橋本町 橋本町 橋本町 橋本町 橋本町 橋本町 橋本町

伊都郡橋本驛邑記
南海之於若木紀維是宕蕩焉云云鼎峯之下有奔川其源
發洎吉阜之崛岬而環潛入海矣云云於是高野中興一山
貫首青巖興山兩官寺住持木食上人院務之暇竊蘊欲架
橋梁於川上以濟萬人之勞酸且創新驛而充來往旅食
之慈念統承以聞乎大閣豐臣秀吉公茲者大閣君深感
嗟其廣濟之利而一應于其素願也矣上人忻踴之餘促
命令於四方驅逐千萬人橋梁不日而就焉其名於斯人
三十間相尋繩幹乎新驛之事驛亦亟而就矣迺以給於
此驛地之曠野躉畝是欲土俗之恆產難太閣君也公裁
累訴於令驛之免焉驛邑之酉庶等爲浴濡澤乃相議而造
已斷而永又以免焉驛邑之酉庶等爲浴濡澤乃相議而造

興一梵字此分采尊号而稱應其寺負以告誠乎澆世之子

孫云乃作橋銘曰揭厲庸禁橋梁之長當涉之襟
滾滾紀川自古巨今脩虹飲川神龍漲瀾
其利之邈魚遊戲湍李冰推巧元凱同功
客路印霜觀從渭東吾祖構架精進濟孤
源發古岳般若度愚惟德惟恩一揚一揄
吾祖善功

○川上船橋本町上

橋本府下より勢州街道の十有餘里に在り公私運
送乃荷物常小姓来一且和州より府下へ船積の荷物
悉てあつあつ積之當所よりも亦一府下に至りて
川上船より又旅人の便船あり皆一日あつて府下へ運
去の頃ハ伊勢系宮より大和乃勝地を経て或ハ高野或ハ
川或ハ根来或ハ紀三井寺に出るゝの絡繹して絶えざれば
宿代つゞ投を實小運送橋湊の地といふべし

九月十三夜橋本の里より
よ聖川河も清く長月月も流れてくるるを為 本居大平

應其寺橋本町上より中興山普門院と号し真言宗古義 奉尊十一面觀音

土屋氏裔同所より修之屋氏ハ頼朝の御臣なり家系こそまはれ
今畧に家にな文書校廻を懸け一二代ありと載す

攝津國冠元朝用分任繪旨知行所有沙汰者也 天氣如
此惡之以此狀

正平二十年八月三日 右馬頭判
土屋兵庫助啟

和泉國森次領朝用分事任今年後三月廿四日繪旨可任
沙汰居土屋誠後守於當所之由取作也仍執達如件
元中七年四月廿日 伊豫守判

楠本右馬頭啟

陵山古依田村のわ
一丁汗より

其の里より山の方三丁許に陵山とよぶ小山あり松林あり
 ぐらにまで生えげさくつと神といふ山の正南小石壇あり
 昔よりこれより宅ありと云ふれどもありては庚申
 寺といふ寺ありと云ふ通ふ多しなり今西の方
 乃をむくればよりこれより數十歩ありて寺七尋あり周り
 二町許乃園に築きたる塚ありて幅二間ありの境を隈
 どりその内よりあり曲玉管石を拾ひ一人も取りし此
 塚と云ふすもむもぬく石を奪めれがよき若夜厚くかき
 糸頂少く産少く小祠あり成里人ら庚申の祠なりといふ
 とも寛永年間乃紀より所車崎の宮と書やり所車崎ハミ
 くられの紀より里人陵乃字をきくべしと漫に充たるなり
 一も窪地ありをふめむと云ふらうと云ふらうと云ふらう

ろありとおぼしとこの棺を納め大石を置きて覆つるなり
 一かくつらゝゝ築れははら大なる塚はありと云ふなり
 三つ一人ら紀古佐美朝臣の墓なりといふなり紀伊國を
 紀氏の授けし地を古佐田村といふなり古佐美田の墓と略り
 傳りやといふ説なりといふ説いなり又ある里人曰田村麻呂
 大宿禰の墓といふなり中昔乃此れありに坂上氏多
 くれを思ひよせしれありと云ふなり大宿禰の墓ハ山城國
 宇治郡栗栖村なりと云ふなり傳記に云はるは説くは
 らむ坂上氏の墓なりといふなりハありや坂ありげられハ
 る人ハその遠祖阿知使主なるの墓なりといふなり田村麻呂の
 名世よりいふなりと云ふなりこれありと云ふなり湯もるなり
 と云ふなりと田村麻呂墓といふなり古傳にありと云ふなり
 然るに考へたり古墳ハ圓くまいて多しなり成ありれといふ

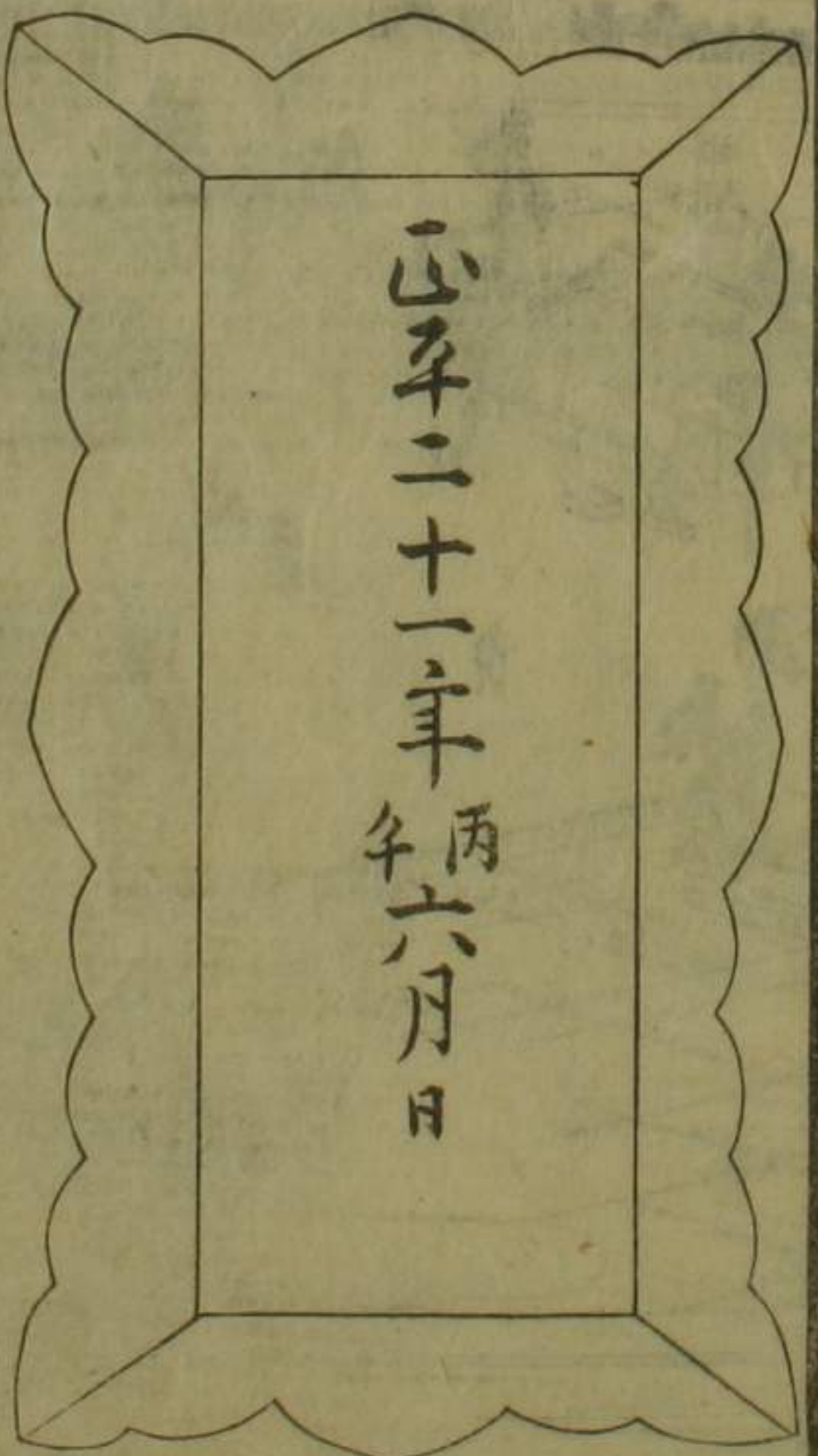
つとど人臣の墓よりなり飛城の大なるいんをばこれを上
 古れ皇族皇子あとの御墓よりなりむりくこれ陵地もみど
 き世終るこれよりい様ありあは殿ら或は殿らもりうて
 今の御代よりして御跡乃らりなるぬもああるをけいはい
 を飛城跡よりなり斧をいふ志もそのもなり里人いなり
 あら多しなりなり伝乃らりなるぬといや口を
 しれりになむ

相賀八幡宮 相麻生村

當社ら相賀村中十一ヶ村の産神ありて近郷の大社あり
 中頃坂より氏人多し清水八幡宮を勧請して茲の鎮護と
 以てし神庫より文龜永祿等の祭文あり坂上氏氏事
 を載次多居る額八幡大菩薩と書け背面の銘左
 なり也と

額裏

正平二十一年 丙午六月日



牲川氏宅址 相麻生村の内大茅

牲川氏ハ生地氏と並び稱せられ楠公の旗下に属し事
 蹟尤多し 軍記類聚 其祖代多し良五希義春といひ治承年
 中源頼朝公より伊豆國江川莊を領次より世孫を希
 重範といひ承久丸後領地成幸國小受け那賀郡那賀郷
 小作と楠正成の祖父掃部頭盛仲が女を娶つてその子成産
 む嫡子を野上孫三希頼重といひ次男を牲川三希左衛門



玉垣
 光
 三崑雙
 一好



胡麻生
 八幡

神宮此且洒
 占空幾秋春
 靈著正平額
 崇敦相賀民
 祭儀尚儼蕭
 享祀自精純
 不朽降威福
 嶺南長白鎮
 木教題



頼俊と云ふ二男を河川左門重幸と云皆官軍に属し多く良
三家と稱し頼俊を以て軍功を殊とといへども南朝遂に
妻一六十津川郷に遁る頼俊が子を流後守俊春といふ文
明年同守後高山尾張守の旗トとあり城を長教に築れ若
内郷少く一萬石を領し俊春の孫を義則といふ
年松永弾正が為し落城しその子成義次といふ永禄二年三
好長慶高尾城を攻めしれ高山高政に從く大少功あり
同二年長教城を賣て杉本を退く高政没落のち織田
公に從ひて高野を攻むる子成義流し豊右衛門一敵し
て遂に討死す

易産山護國院地藏寺 善福寺村の小名タワリ當寺天平九年796基
善福寺の同堂にして聖觀文遊鳥廢りしと云ひあり
と云ふも昔々本尊子安地藏尊 長三尺五寸の基は自勝く其玉以て
會社備まつを以てそのまゝでせぬらあり

紀伊見崎 東家村より七十丁をりて是
より河内國三田市まで二里

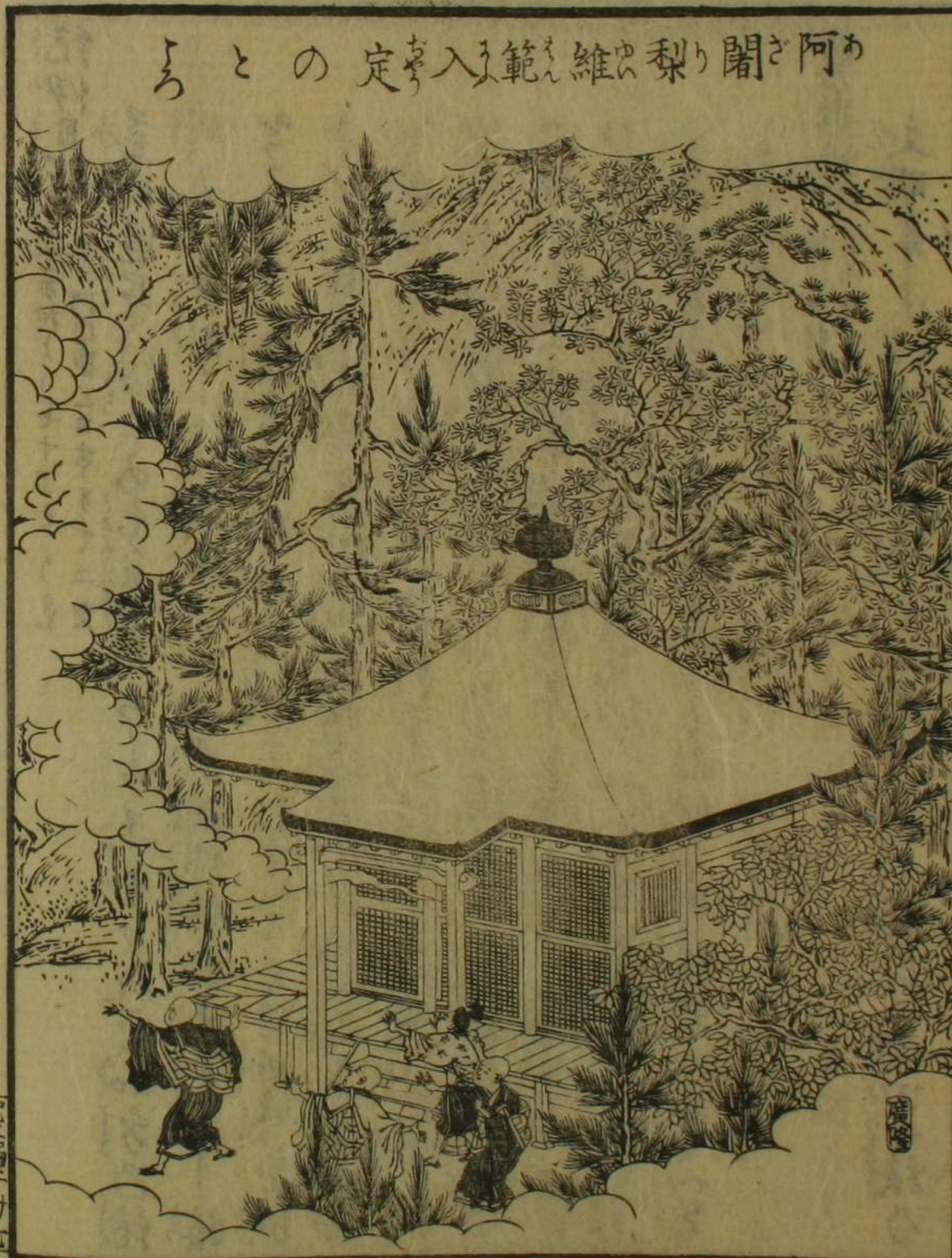
舊城連峯此中このま最卑くして平易なれを北方乃緒
洲より率圍し入る通路と云河内國錦部郡天見村に接
せりむう緒帝高野山より幸したり入るも皆此作を城
とせしむし永承年中園白頼通公御系傳の記に嘯吟山
を城ゆりしと云ふも此も此の道なり嘯吟山を舊城
續乃小山の題名なれをあるもまろつて多し地も此の
すかろく南山登詣の編素年々漸く以て多し城を以てい
つ乃比より山麓に茶店を建てた密舎を建てし孫より
を酒旗を以てしりびさあけぬ神りて禮奉乃旅人を
まひるもりて

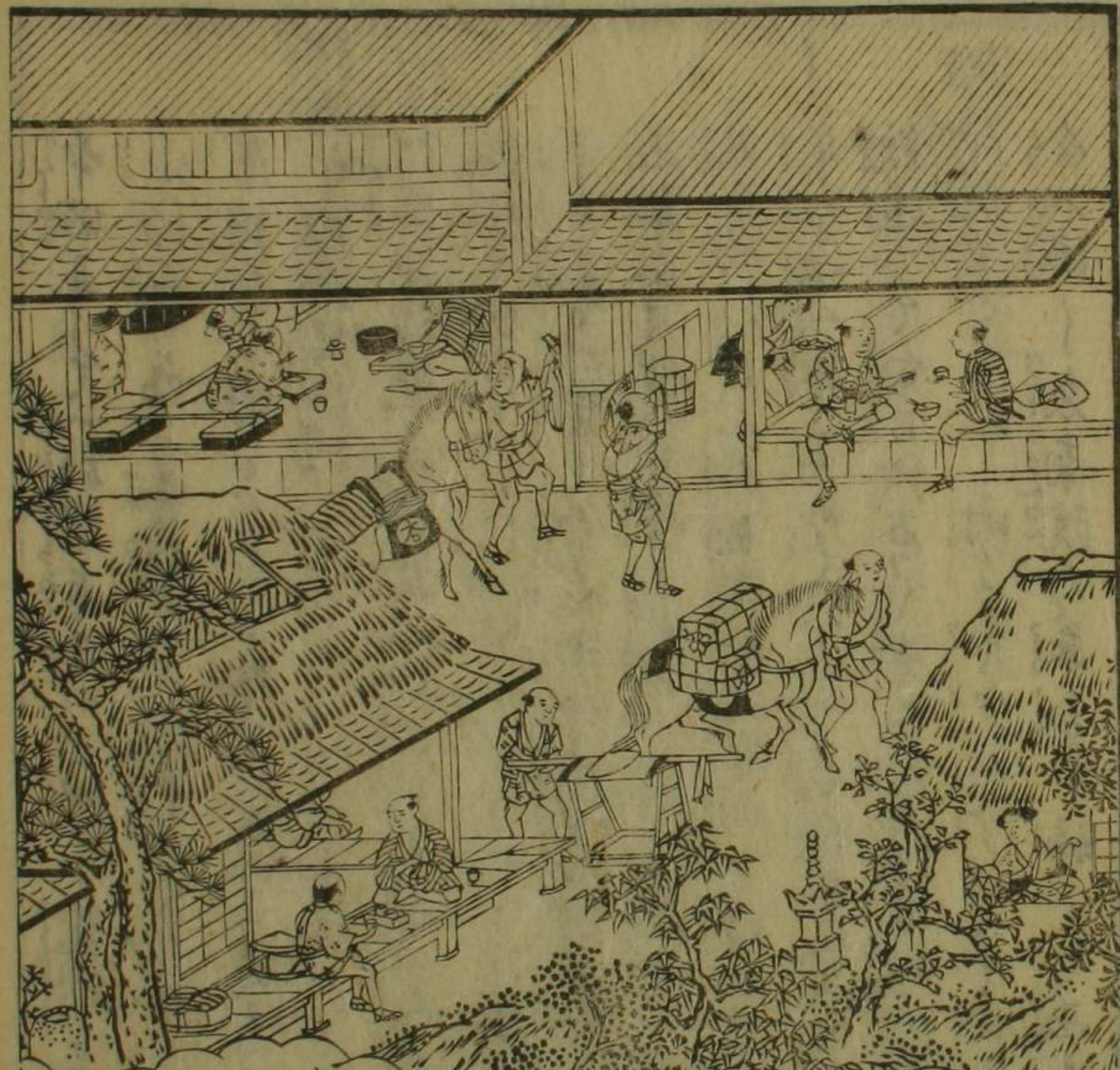
長教城跡 細川上村

文明年中牝川義春始く此城を築く或いは隅田一族の



阿闍梨維範入定との





新撰長祿寛正記
 寛正四年三月十四日
 嶽山の奇手の中奈
 良の成真院より
 こゝろ國見山の
 頂上陣より城中
 南の口の通路を
 指留けしハ
 忽小兵糧
 つき菟城
 不叶義純
 嶽山を北落ら
 御供の侍紀伊見峠
 へかくを口蹄ける
 復お片る
 紀のみ峠の
 ゆく赤毛
 ひとに手かせく
 さくそ那をえむ

紀伊見峠
きいのみがたけ



紀三編二冊八

本城ありて一族中年老の士此より籠城と云く永禄元年松
永保正の為不素拔きて城郭一も跡なきの事と云くとも
基跡も不存して古を想像と云くは是なり

河内梨維範河内の地今
元亨釋書

河内梨維範ハ紀伊國伊都郡相賀郷乃人トシ姓ハ紀氏アリ
顯密ノ性ヲミテ山林ノ人ヲ慕フ小平城乃月ヲ辭シ
三年正月廿八日嫁小惱ありて後二日を過ク傍ガ端坐シテ
西ノ向イニ小妙觀密智ハ定印ヲ結ビヨリ孫院妙乘ノ室
号ヲ唱メ眠リカケルニ一ツケ絶死又五日を経テ廟室リ
飲送シテ旬日成リテ弟子等性々何レハ客教交セ凡定
印乱ルニコレ一ツケ中ニ夢アリテ曰ク維範河内梨只
今入滅ス忽南院乃草舎ヲ辭シテ西去ノ蓮基ニ移ル

紀三編二ノ卅九

云

調御房定嚴高野山住生傳日上

調御房定嚴ハ紀州相賀人ナリ俗姓ハ紀氏和名野山小登
ノ大師乃送才小列ノ又多武業ノ修シテ天台の法門ヲ學
ビ遂ニ平山の意室ニ歸リ仁平二年八月廿二日入滅於朝
日院ニシテ念佛絶命スルニ定印結シテアリ
按之小河
の地ニ産
スル高僧碩徳古今ニ流ルテ教多ありト云クも野山ノ名ハ頂
南紀風雅集ニ因リテ高野山金光院意室の傳ヲ載ス應山も亦當郡乃人ナ
リト云ク掲ク

幽居口號四首

釋應山

獨坐幽栖知昨非
殘生日日鎖柴扉
午天睡覺鉤簾處
雲路背花見雁歸
七雄三國事干戈
白骨如山紅血河
元是利關名路士
不知瓢底一清波

依社誅伐凶徒能馳奔
御方作以此之趣可有
御披露伴忠信謹言

元弘三年六月十日

藤原忠長上

進上 御奉行所

足利尊氏公草名



不動山

杖尾村明王寺乃後... 樹乃類... 不動明王

寶雲山小峰寺

高野山雲堂

釣鐘

夫音聲之圓達十方莫過於鐘響也故每梵刹必設鐘
奠以報二六之期限宵警萬庶之長眠凡有一觸撥於

耳根者迫得脫三世之苦輪所謂圓音一演異類等解
復其如是也耶當山也者役公優婆塞掛錫樓心之修
練場也初基之初因五色之氤氳乎四邊山号寶雲以
大岳之形對于前而稱小峰自爾以降千有餘禩雖
其間似有興廢竟不與起滅遷謝者無盡莊嚴寶雲地
也乎貧道今時以是鐘之不備允為梵具之缺典故募
化萬戶而得遂陶鑄之功伏以大施小施同住平等之
法界有聞無聞均遊圓通淨刹焉銘曰
霜風一震 響徧虛空
萬籟攬眠 莫利不聞
霜統大小 岳蘊寶雲
人法不滅 音響無歇

霜草烟草

南紀風雅集

烟草

釋日元

手收秋後數莖葉口腹朝來一片烟人許四功吾未信

客亭唯奪酒茶權

一色春信

俳諧深山木

五橋亭風圭
ソノのむう... 一色春信



四

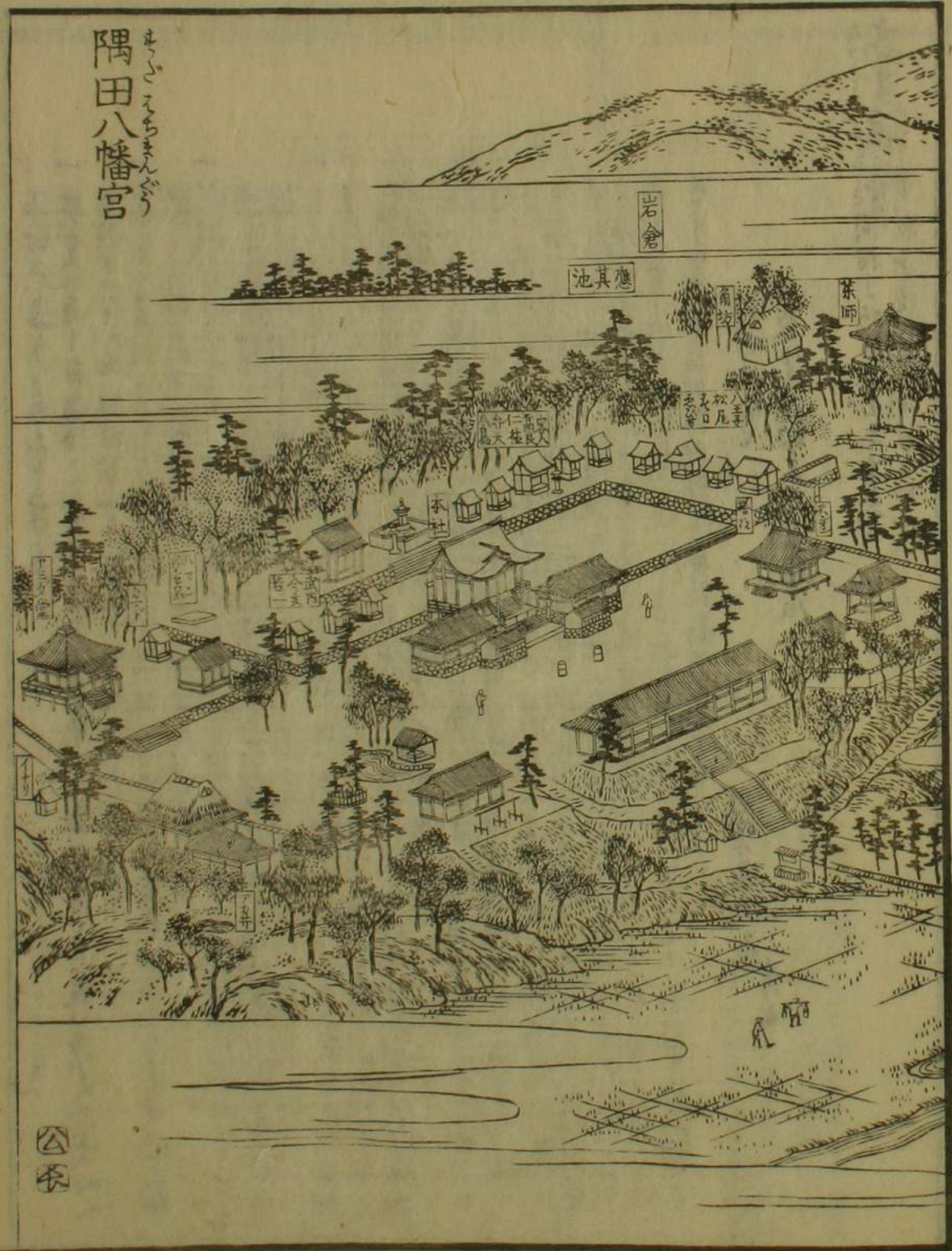
闇饅頭屋

參宮往來斯吞茶
 囊中探錢黑暗嶺
 名物夫婦饅頭其
 不芳草津姥之餅
 唐邊木

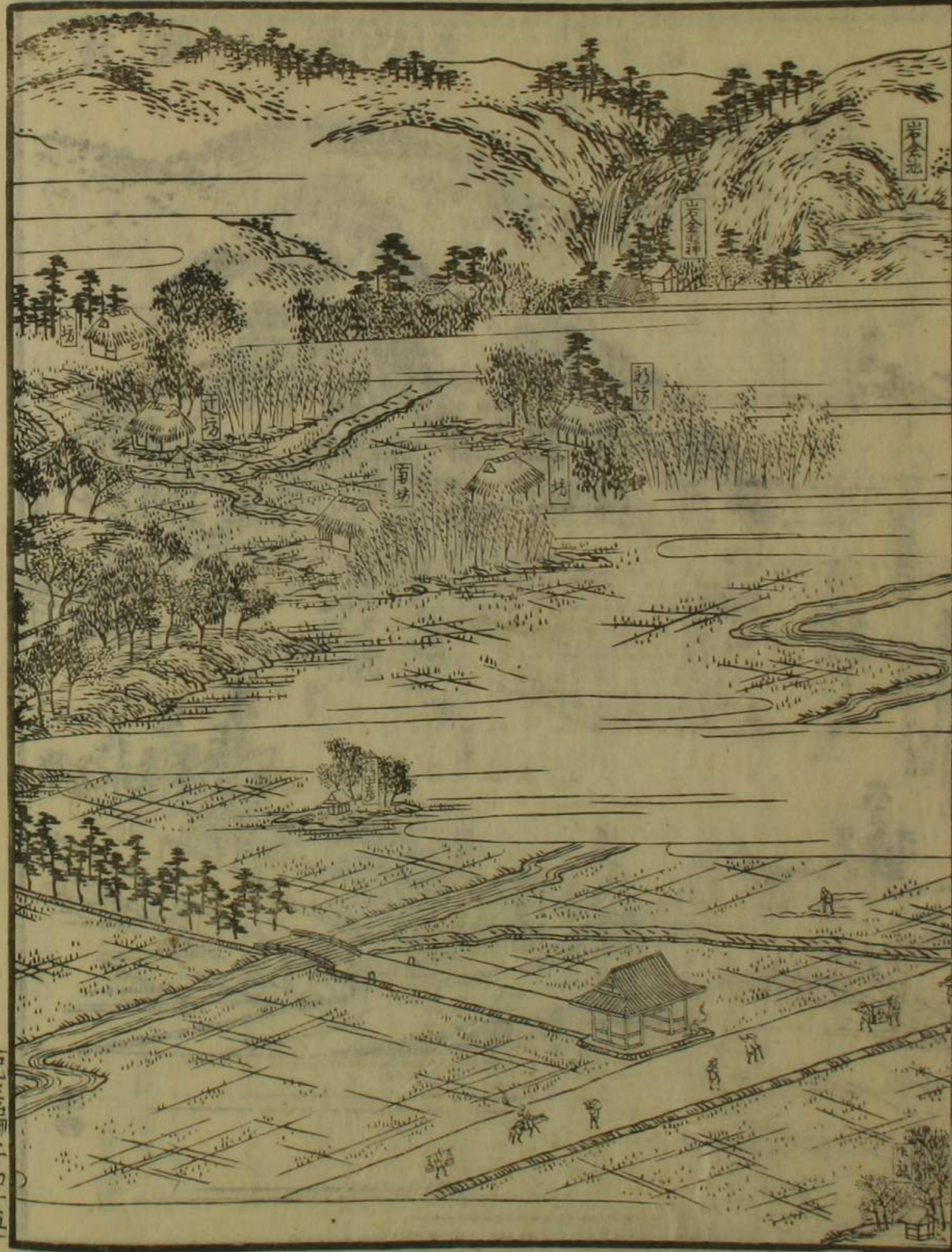


卷三十四

隅田八幡宮
まがし ちちまんぐう



公系



祝三編二四十五

當社の草創時代久遠ありて詳ならず或説く上古 應神天皇
 皇日高郡より大和國より航せられたる時行宮此地に於て
 以て後人祠を建て祀を承りんとすなり其の神代より
 石清水の領と稱せられたる當社を隅田の別宮と稱し
 男山より政所を置き島羽天皇保安年中阿田堂
 の中藤原忠村が下人として當社に別當職を補せし
 是より高連綿として職を任ぜられたる 此年古文書に
 後隅田より後乃後軍事に専らして此地に政廳を威を
 近國に振いしより社殿を建造し祭式を嚴めしめて
 神の加護を祈る事蹟を記し及石碑に於て南朝朝乃
 間には寄附の神田少くは比古論旨に宣今程多く
 傳ふに元永禄年間焼亡し多しなり其の城考より元永の
 年

八幡隅田別宮政所符

藤原忠村

右人補任借別當之職如件

西清権守

保安五年二月十日

使

言守

八幡宮寺公文所下



廣隆模寫



古鏡
直五寸三分
厚廿四分

可卑守傍例兵士役事
 右當官帝領者諸國在之高云兵士
 役大來由事去送東大寺史役敢無其
 催之慶今有此沙汰云、依先例守傍例
 不可勤仕之狀所仰
 建久八年二月
 如件
 日堂達法師
 持齋法師
 持寺主法師

以下連署畧之

粉河田

上風村領大城跡の南にあり、後醍醐天皇の御代に此地に粉河田と名づく

粉河寺縁起云 第一洲に粉河田と名づく

良心大和園内郡大鳥郷河邊多院の住僧あり純伊園伊部
郡隅田莊戸主といふ所より田二段あり粉河田と名づく寛
平元年の秋乃以奉主田を守り奉主小田を刈去りて
を放て射りて光を出入りてそれを見毛の馬なり奉
る所を檢知する小人乃刈かきてせりてあま
小なりぬ奉主忠怖して祈禱のつ先良心より寄附と良心
奉此実言成んぬ小奉主あまを何し或奉主の良心
り新小僧二把なりてを刈かきて還る良心おせし
乃高野の政所にて奉め粉河寺成り奉主の
陣入りより常僧傍小僧細をとりて僧徒を重く用
りて河邊の常小僧二把あり良心不思識の心をか

しと素籠しと周縁を祈念するに愛中小先の小僧あり
云我ハ大慈悲大將なり汝ハ真言の行者なり故に形を現
して形を以て多の園中人を波久し年ハ我なり寺
小僧して奉主一彼田を園の一乃坪なりあまよふと刈り
戸主の福穂れめつてこれよりあまの園中人を憐むか
為かり良心愛せしむて退却ぬこれよりけ田ハ此寺よふ
を献するなり今よりて奉主

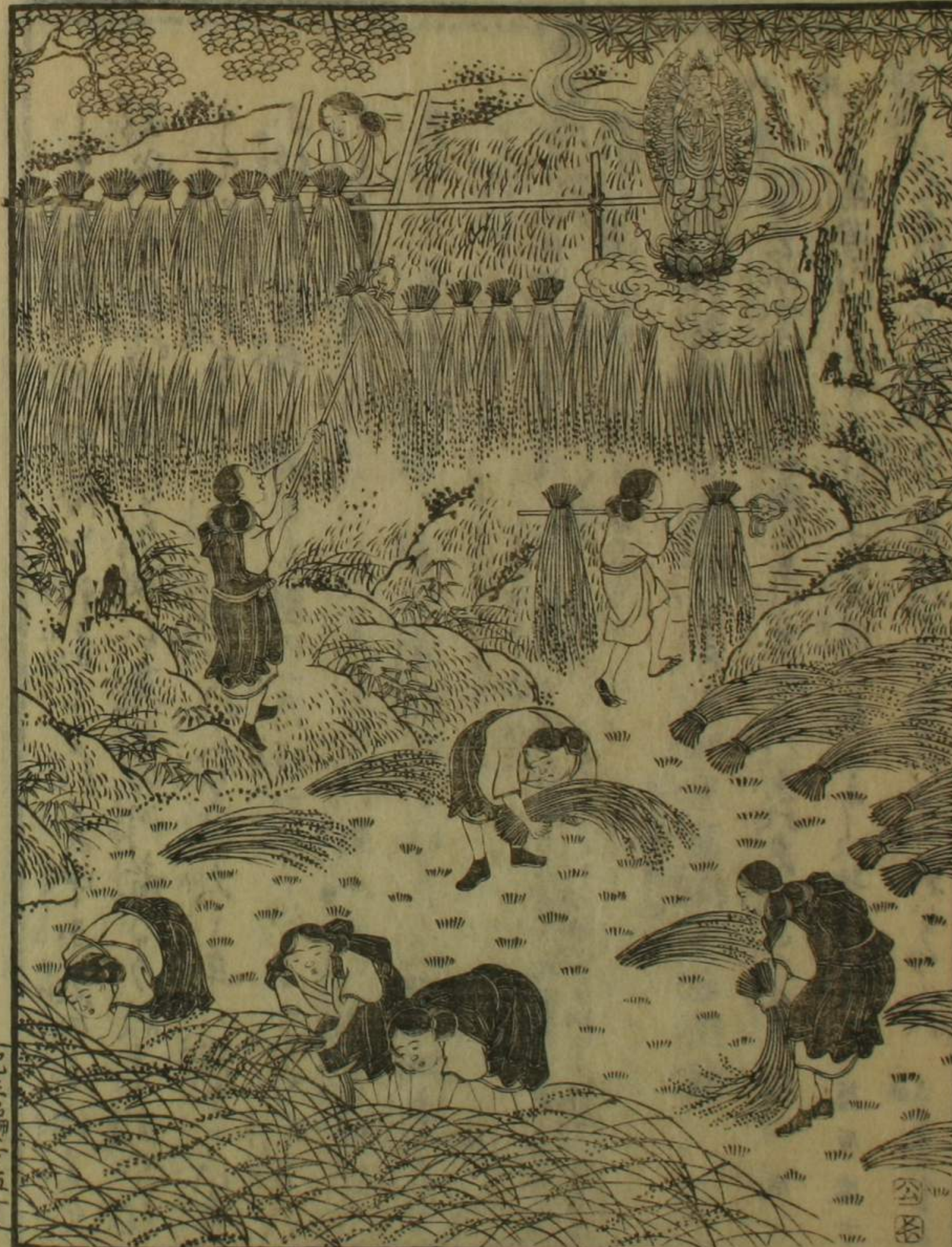
隅田川

記川隅田河を源とし、上流は隅田川とよみ、中流は隅田川とよみ、下流は隅田川とよみ、河口は隅田川とよみ、

萬葉三 亦打山暮越行而廬前乃角太河原爾獨可毛將宿
新勅 わが思ふくまをせしむるも川系此夕も乃
同 角田川をとりて小むせりての味れ表ありけり細ん 藤原盛方
續後拾 角田川をとりて小むせりての味れ表ありけり細ん 二條 太皇太后宮大貳

弁基法師

由[○]田[○]粉[○]
来[○]の[○]河[○]





神野倉谷
落合滝
岩不動



源三篇二十五

庵崎

庵崎の南に山あり、山崎と云ふ。今上同村に岩坂と云ふ。小

新後拾

祝部尚長

秋園集

侍乳山

侍乳山

上同村の乾方より山をとりまわし、山崎の

大寶元年辛丑九月大上天皇幸于紀伊國時歌

萬葉一

朝毛吉木人乏母亦打山行來跡見良武樹人友師母

同四

天皇之行幸乃隨意物部乃八十伴雄與出去之愛夫者天

翔哉輕路從玉田次畝火乎見管麻裳吉木道爾入立真土

山越良武公者黃葉乃散飛見乍親吾者不念草枕客乎便

空常思乍公將有跡安蘇蘇二破且者雖知之加須我仁默

然得不在者吾背子之往乃萬萬將追跡者十遍雖念手嬾

紀三編二五十二

同六

女吾身之有者道守之將問答乎言將遣為便乎不知跡立而爪衝

石上振乃尊者弱女乃惑爾緣而馬自物繩取附肉自物弓

笑圍而王命恐天離夷部爾退古衣又打山從還來奴香聞

同九

朝裳吉木方往君我信土山越濫今日曾雨莫零根

同十二

椽之衣解洗又打山古人爾者猶不如家利

同十三

乞吾駒早去欲亦打山將待妹乎去而速見牟

後撰

侍乳の山乃搦乳

拾遺

こぬ人城ちら此山の郭をわたり

新古今

誰をくも侍乳の山乃女命花枝を勢も人ぞあはれし

同

新古今 侍乳の山乃女命花枝を勢も人ぞあはれし

同

侍乳の山乃女命花枝を勢も人ぞあはれし

續古今

侍乳の山乃女命花枝を勢も人ぞあはれし

侍乳の山乃女命花枝を勢も人ぞあはれし

侍乳の山乃女命花枝を勢も人ぞあはれし

侍乳の山乃女命花枝を勢も人ぞあはれし

遊行他阿



甲和

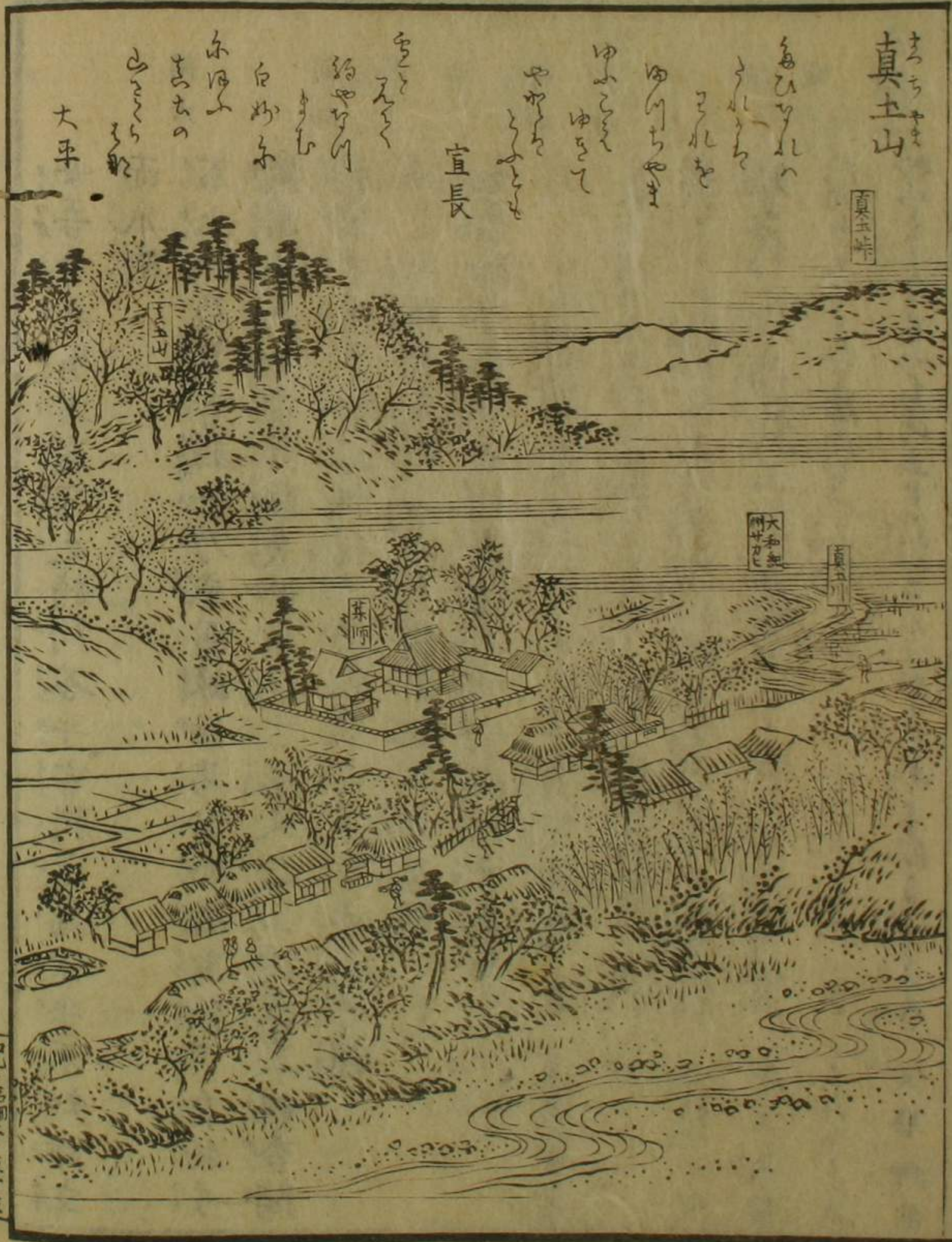
紀州より大和
国子後修せし
ふらう兩國のこ
つひ真土のふて
うまゆさ

まのまの
さうひを
しん

まのまの
川

これより
そ

真土山



真土山

まのまの
これ

ゆのちち
ゆ

や
ゆ

宜長

釣
白
赤

赤
まの

大平

紀三編二平三

同

我育子と侍乳の山此當る

鎌倉右大臣

新千載

たき少も舎城とせん流乳山の中えり

前參議定實

新續喜

嘆やぬ花城の中は山のそん人あめ

前攝政右大臣

隈川

隈川は平野上流を経て紀川に合流

萬葉七

白栲爾丹保布信土之山川爾吾馬難家戀良下

知家

續古今

麓合不動

場川の上流上風平野の間紀和乃

流を通べ川中ね不動若くして不動を彫付

折新を刻その多く西岩不動此小堂を建

け更よろらむびり東西水の二面連

鳥帽子岩國と云當れ奇石を同

六人部氏

紀三編二五十四

三代實錄云

貞觀八年七月廿五日丁卯紀伊國言伊都郡人六人部由

貴繼生白人男女二人男年二歳長二尺四寸女五歳長二

尺一分兩兒生而肌膚鬢髮眉眼舉身純白如雪因得見暗

夜不能向白日父母陰藏養成今圖其形進之

紀和兩國古場

今の場川乃東官道より山を侍乳峰とついで大和國と隸

たり右の峰より少く南の方を越ゆる或南海道より

所謂美土山是なり上世は海道成本多と云く帝都より

紀伊國より物門の義ありそ山脈を首峰連峯不起して水

より南に走り紀和兩國乃隔をせり古國郡の場を定む

るとれけ山北東を大和より西は紀伊よりあり

乃奇少も本道より少く美土山とよめ

記ありそ

本原島田等の村ありて今大和小原をれども天正以前乃文
書小二村を我隅田莊と云ふ益澄とすべしかきまはる山は古
ハ紀和を園場の山今大和園の地なり名所記の類或ハ武苑
と云ハ駿河とするその皆萬葉集の類ありてかきまはる
と云ふべし

取

下 紀伊國隅田庄本原島田

補任

地頭代職事

隅田三郎兵衛對忠能

右以人所補任彼職也年貢
下任先例可致沙石此以伴

永仁六年六月十九日

取

下 紀伊國隅田庄本原島田

定補

地頭代職事

隅田三郎兵衛道

右人所補彼職也早出元可足
可勢之狀如件以下

弘安十二年正月十九日

右二通葛原平兵衛藏

紀伊國名所圖會三編卷之二終

紀三編卷之十六

